日本人会会報

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

Tarsius

タルシウス

パールビーチからの眺め　撮影：中村

令和元年８月発行

目　　次

01.	ちょっと小話	木谷　雅一	P. 02
02.	麻薬取締	中村　高太郎	P. 08
03.	ボルティム旅行記	今泉　宏	P. 13
04.	土地の測量と登記	中村　高太郎	P. 18
05.	下関で捕鯨について考える	大貫　周明	P. 25
06.	書籍紹介-小坂清見著「わが青春のメナド」		P. 28
07.	編集後記		P. 57
08.	北スラウェシ日本人会会員名簿		P. 58

ちょっと小話

木谷　雅一

皆さんこんにちは

個人的には、ラジャアンパットに居た頃に書いていた私のブログが、年内で運営を終了するということなのでどこかに引っ越ししようか、とのんびり考え中の日々を送っています。

では、昨年同様に今回もダラダラと小話を書こうと思います。

〇5 月

今年 2019 年 5 月に日本では平成から令和へと時代が移り、この北スラ日本人会の会報タルシウスも令和初めての発行になりますね。

おめでとうございます？？？。なんと言えばいいのか悩みますね・・

年号で聞くと自分の年齢はなんとかですが、他の方の年齢を数えることがさらに難しくなったということですね。まぁ、年齢なんてあまり気にしないようになってしまいましたが・・

毎年 5 月上旬、そう日本のゴールデンウイーク（GW）はマナドを訪れる日本人の方が目立つ時期ですね。観光業に関わっていませんが、空港や国内線の機内などでやや日本人の姿が目に付くようになる時期です。

私は海に関わる仕事をしていますが、やはり 5 月というのは海も比較的落ち着いていて良い時期だと思っています。

インドネシアでは、年始から北風のうねり、南東風の風浪、西風の嵐、そしてまた北風。と海に関わる方々の季節の呼び名があります。5 月はこの北風から南東風の間になります。

そう、まさしくくるっと 1 周するのであれば、東風と呼んでいい時期なのですが、あまり荒れない時期なので呼び名すらつけてもらえ無い・・・

美しい時、かすかな明りなどを詩に読む国もありますが、こちらの風に関しては荒い危険な時期の名前があるだけです。

乾期が終わって雨期になると始まる果物のシーズンは、年末年始に多くの果物を見かけます。（マンゴ→ドリアン→マンゴスティン）果物は少し終わりかけ・・もしくは始まる前・・という時期なので、少し残念な 5 月です。マレー半島のタイとは雨期と乾期が全く逆になるインドネシアですが、もちろんマレー半島に近い地方では 7 月前後に果物の季節があるはずです。7 月もありそうですね（7 月のドリアンはたまにみかけます）・・インドネシアはその東にある

だけなので、そこまではっきりと分かれてないでしょうしね。（同じ地球で一緒に回っているしね）

天気はスコール（夕立）があり、タイミングによっては雨の観光になりかねないのですが、海は雨による濁りも少なく、透明度がなぜか良い方です（場所によります）。日本でも潮干狩りが行われる春の大潮の影響かな？ですね。。（大きく引く→いつもより潮が速い）

これからマナド（北スラ）の海へ！！とお考えの方は、日本の GW を私はお勧めします。

海の中の生き物状況については、ダイバーさんの情報を頼ってください。

〇Bitung

という 5 月ですが、今年 2019 年は私も地元ながらビトゥン（ビトン）観光行ってきました。（私は書き慣れているのでビトンにします）

マナドの空港から 1 時間ぐらいで、ビトン市の端っこに着きます。あっ！車です。電車などないので。

2018 年の 1 部開通予定だったマナドービトン間の高速道路は、残念ながらというのか・・こんなものだろうかと思いますが、2019 年 6 月現在まだ開通していません。一部 SNS で高速道路走行中の動画が出ていますが、料金所がまだできてないので、勝手に中に入って走った模様かと思います。　また、一部開通区間は空港からビトンに向かうのであれば走行しないエリアになります。5 月に行われたインドネシア大統領選挙の前には開通される！とか、今の大統領任期内に！！とかいろいろ言われますが、ここでは馴染みの口だけ・・になっていますね。でも、完成はしていませんが目で見える形になので、10 年以内には出来るでしょう。

ビトン観光！・・・今回は付き添いで行くことになったので、あらためてビトンに行って何がある？と考えさせられたのですが・・・

レンベ島のキリスト像はマナドのチトラランドにある世界第 2 位の大きさのキリスト像の陰になっていますし・・

他には、レンベの海（ダイバーさん向け）・・小さな動物園（サル・ワニ・鳥・蛇）には、タルシウスも飼われています。・・慰霊塔・・ビトン市中心地にある「I LOVE BITUNG」の文字看板（だから何？のレベルですが、ビトンに来た証拠にはやりのセルフィー（自撮り）にどうぞ）

そして、今回の本題となるタンココ国立公園です。（ビトン市ではないと思いますが、ビトン方面なので）

○タンココ国立公園

前述したビトン市の端のマナド側にあるギリアン地区から自然保護区の方向へ行く道（Likupang-Girian）を利用するのですが、ギリアンからは車で 35 分ほどで国立公園のゲートがあるバトゥ・プティ（Batu putih）村に着きます。（空港からだと 2 時間弱です）

今はすべてアスファルト舗装されているクネクネの山間道です。もちろんこちらレベルなので、急に穴があいていたりしますがね。

タンココ山の頂上を目指す！わけではなく、海岸に近いこの村から自然保護区へのエントリーをします。保護区内へは入園料のほか、地元ガイドと共に入ることになります。

このタンココ国立公園ツアーは各ホテルや旅行代理店が、送迎付きや途中でご飯を食べるツアーなどやっていますね。1 万円弱かと思います。

今回、私がお世話になったガイドさんは、国立公園の入り口付近で売店を営み、店内で孫の世話をしていたおば様です。（インドネシア式？ジャワ式？の天井からつらされた布にくるまれた孫を上下に揺らしてました）

出会いは、公園の入り口に到着して、近くの売店で「どうやってガイドを雇って公園内にはいるんだ？」と聞いたら、「私がガイドできる！」というものでした。

ガイド料＋入園料で 20 万ルピア。2－2.5 時間のショートタイムです。4 時間ほどのロングタイムだと 30 万ルピアだそうです。　まだ頭の中は山の上り感覚だったので、さすがにいきなり 4 時間の散策は・・・とショートにしました。話ではショートでもタルシウスはもちろん、黒猿に会えるはずということだったので。

NTT 州のコモドドラゴンのいる所でも国立公園への入園は 10 万ルピアといいますから、料金に関してはこんなもんだろうと思います。（外国人価格が設定されていれば、外国人はもう少し高め）ただ、20－30 人の団体で行くときはガイド料値切るぞ！ですね。

レンジャー部隊（オレンジ色の制服か軍の迷彩柄、もしくは森林警察部隊）と共に銃器持参で散策するのか？とも思っていましたが・・T シャツ・短パン・ビーチサンダルのおばちゃんと共に公園内へ！GO!

駐車場に車を置いてゲートをくぐって、出来合いのまっすぐな道を歩くとすぐ現れるのが、ウォーレスさんの像。

マレー系とオーストラリア系の生態系の境目を調べたウォーレスさん。この方が引いた線（ウォーレス線）が地球の赤道のように線引きされているのが見えます。（見えたら怖い）

まずこのあたりで出会えるのは、街中ではあまり聞かない蝉の声。大合唱です。日本の夏の森林を思い出させるくらいの数で鳴いている蝉。なぜ自然保護区にはいっぱいいるのに街中にはあまりいないのか・・？　日本なんて街路樹にもいるのに。

蝉だけで話が脱線していると、この記事がいつ終わるのかと心配になるので、「なぜインドネシアの街中には蝉は見当たらないのか？」をテーマに、興味がある方は議論・検索してみてください。逆に「日本はなぜ街中に蝉がいっぱいいるのか？」とかね。（笑）

それにしても、10 分歩いてもその先進んでも・・・ただ平坦でブルドーザーなどで整地された未舗装の道。それも道の両脇には見た覚えのある木が・・カユ・ジャティが植えられているじゃないですか！チーク材として有名な高級材木です。人の手で作られた平坦な道をスタスタ歩いていると・・・

道脇の木で数匹の蝶々が舞っていました。

飛んでいるのではなく、まさしくふわふわと数匹で舞うようにゆらりとひらひらと・・（日本語は豊富な表現があっていいですね～。インドネシア語なら●●のようにゆっくりと飛んでいるとか踊っているぐらいじゃないのかな？）

残念ながら、携帯電話のカメラしか持参しなかった私には撮れなかったです。

しばらくそのまま平坦な道を行くと、木の上に獣が！！

かなり高い場所なの、ガイドさんが持参していた、いかにも軍で使っていました！っぽい双眼鏡で確認。。クスクスでした。じっと止まっているとナマケモノっぽいですが。

他にもカワセミのような鳥、オウム系の鳥。。。（すみません、正式名称全く無知で（笑））

まだまだ、平坦な海岸から少し離れますが、そこに沿った道です。30 分から 1 時間弱はその道です。

途中自然公園内で調査している人たちの寝泊まりする建物を過ぎながら進むと、見覚えのあるタルシウスの小さな看板が出てきます。「タルシウスのエリア」てな感じで書かれていますが、「既に動物園か！」と心の中で突っ込みながら・・

そのエリアに入ってから、やっと平坦な道から離れ、少し丘を登り始めました。

そんなに歩いていません・・・

少し汗がじっとり（ずっと木で覆われた日陰を歩いているので）、息切れが少々・・という

距離でガイドさんが付近の木を探し始めます。

もう、付近に中に穴があいている木が多く見当たります。

今回のガイドさん・・・スパルタだから・・(笑)

木の幹をコンコンとたたくと、中にタルシウスがいると彼らはびっくりして穴から外を覗きに出てきます。

夜行性のタルシウス・・15 時過ぎから公園に入ったので、16 時ころかと思いますが起こされましたね。

こちらも、なんとか写真を撮ろうと頑張りましたが、薄暗い森林の中であまり近づけない(自分の背丈より上にいたので、近づくと真下からになりますしね。

写真家を目指してはいないので、個人的な記録用だから・・と諦めの画質で・・←本人現地ではプロのカメラマン並みの気持ちでいろいろ考えて試し撮りしていましたが(笑)

ガイドさんに何時くらいに訪れるとタルシウスと出会いやすい？どれくらいのファミリーがいるのか？聞いてみましたが、数え切れていないぐらいいっぱいいるので、いつでもここに来れば誰かが木の中にいる・・・だそうです。「誰か」名前や標識をつけて管理されていないので、今日と明日の同じ木のタルシウスが同じ子なのかは、まだわからないみたいですね。(今回のガイドさんは)

ここで折り返して帰れば、たぶん 2 時間弱の森林散歩で終わりますね。歩く場所はほとんど平坦な道。

　そして今回のもう一つのリクエストに応えるべく黒猿探しのためにさらに森林の中をうろうろ・・ビトン市内のモニュメントにもなっているお尻の赤さが目立つ黒毛のお猿。

コロニーで移動をしているはずなので、ガイドさんの経験と携帯からくる仲間からの情報が頼り・・森林内はブロック分けされているようで、昨日は A に居たとか・・いろいろ情報が入ってきます。他ガイドさん以外に調査隊や警備の人も公園内に入りますからね。

軽い起伏を上り下りしながらの探索が続きます。途中で鳥を見かけては観察したり・・

そろそろ慣れてなくてバテてきた頃、ガイドさん群れを探し当ててくれました。オス猿がじっと見守る中、子ザルたちは木に登ったりして遊び、メス猿はまだ赤ちゃん猿の世話や毛繕い・・そんな群れとの出会いでした。人に慣れたもので、すぐに逃げたりということはなかったです。ここでも木々で覆われて薄暗いし、生き物へのフラッシュ撮影は基本タブーだし・・・遠いし・・まぁ～撮れません(笑)

少し黒猿探しにうろついたので戻った時には 2 時間半を過ぎていましたが、あっというまのことでした。一番長いのは、海岸に近い平坦な道を歩くことですね・・

2～3 時間散策しても大丈夫という年齢なら可能です。つかまりながら登るとかということはなかったです。

服装は、森林に入る格好で、水分も欲しいですね。森林内の散策なので日焼けはそれほどしないです。天候しだいではぬかるみもありそうです。もちろん蚊はいますよ。

という私は、短パンビーサンでしたが。

という今回のビトン観光。

タンココ国立公園のみ、やここまでの通り道から近い慰霊塔にプラスでよるぐらいなら、お昼ご飯食べてからマナドを出発して、15－18 時に散策。20 時頃にはマナドに戻れます。

今回は急に起こされてじっとしている野生のタルシウスでしたが、主食のバッタを食べる姿は、まさしく映画グレムリン！ですね（笑）、前述したビトンの動物園で食べる姿は見たことがあります。

昔からカツオの水揚げ港のビトン。水産加工会社や魚市場、キハダマグロの切り身（刺身用も有り）を販売している加工場（日本との取引のある会社が多い）やキハダのハラミ（トロの部分ですね）を焼いたものを提供するレストランなど・・

ぜひまったりと一日ビトン観光でもどうぞ・・

マグロのハラミを焼いたものについては、マナド空港近くやマナド市内のショッピングモール付近でも提供しているお店はあります。

マグロについてくわしく知りたい方は、ここの日本人会会員にマグロと関わっている方もいますよ。

長々と、ダラダラと 5000 文字以上書いてきましたが、ここまで読んでいただきありがとうございます。

簡潔に書けば

「比較的良い季節で日本の GW の 5 月に、タンココ国立公園に行ってタルシウス見てきました」（2 行かよ！！）

ということなのですが・・・

今回はこの辺で・・・失礼します・

麻薬取締

中村　高太郎

初めに、タイトルから、私が麻薬がらみに手を染めているわけではありませんので、念のため申し上げておきます。また、取り締まりの、とばっちりを受けたわけでも、何らかの被害があったわけでもありません。・・・ですので、ご安心ください。

2019 年の新年早々、1 月 11 日の朝（といっても早朝ではなく 8 時ごろ）バンという音がしました。

銃声？！まさかね、花火とは若干違う音で、どちらかというと何かモノ（ちょっと重めの石とか）をトタン板に落としたような響きです。私はなに事？と起きるも、妻が、あぁまだ新年の花火が残っていて悪ガキが遊んでいるのだろう・・・といいます。まぁ、そういわれてみるとそれが一番しっくりきます。という事で、眠かったのでもう少し寝ていようと・・・

しかし、その直後、近隣住民の叫び声や慌ただしく走る音も聞こえてきます。やっぱり何事？

近隣住民が野次馬の如く駆けつけていましたが、私は、そとは、なんだか、危なそうでしたので、家の中にいました。

そのうち、情報が入ってきました。私の家は丘の上にあるのですが、その 2 つ下の家の主を警察が捕まえたこと、どうやら武装警察の一人が銃を発砲したことなども分かってきました。しかしそうするうちに、「逃げたり抵抗もしてないのに、発砲した」「ナイフ（もしくは蛮刀？）を振り回して抵抗したので発砲した」・・・など住民情報や警察の言い分など、錯綜してきてます。最終的には、1 つ下の家の敷地から武装警官が発砲したらしい、1 つ家の敷地の住民は、植え込みを荒らされて発砲までされ、ひどく怒っている。また、複数の住民が抵抗はしていなかったという目撃談でした。

現場からは、バック一杯の小分けされた薬物に精密秤など一式の証拠として押収されたという事です。またかねてから近所の噂でも、この辺（町内）の違法薬物とチンピラの元締めだったという事で、発砲の妥当性以外は、警察がねつ造したというわけでもなく、実際にやっていたようです。

逮捕された容疑者は、近所の人のよい、おじさんという感じの人で、私が家の前を通るときも、「やぁ！元気？どこ行くの？」と声をかけてくるような人でした。とてもそのようには見えなく、家も特別豪華で裕福な感じでもなく、目立つ存在でもないから、儲かってない（生活はそこそこできる程度）という感じでした。逆にそうだから、一般の人と大差ないというか、身近なところに違法薬物が存在するという意味でもありますので怖いですね。

当初新聞では終身刑になる見込みと書かれていました。住民の間でも、死刑もあるだろうとか、いや、3～4 年ではないか・・・などなど・・・

もちろん、この辺のエリアのヤクの元締めというだけであり、ビトゥンやマナドのほかのエリア担当や北スラウェシのボスもいるだろうし、ジャカルタにももっと大きなボスがいるだろうと想像はつきます。情報を話して、もっと上層の逮捕などに漕ぎ着ければ、減刑してもらえる可能性もあります。しかし、この容疑者には奥さんもいるし、まだ小さい子供もいるから、情報を話したりすると、報復なども考えられますから、難しいだろうと思われます。

さて、一連の捕り物劇では、突入した武装警官らによって、現金はもとより、すべての預金通帳と表に出ていた携帯電話（子供のものも含む）なども押収されたという事です。さらに数日は何度も警察が押し掛け、その時々でいろいろなものを押収していったという事です。

これでは家族の当面の生活も大変です。第一波の時は、ゴタゴタの隙に、（事前にマニュアルを作ったとか、慣れているのか？わかりませんが・・・）とっさに近隣の家に手持ちの生活費をつかんで、保管を依頼したようです。警察もその時は、バック一杯のヤクが出てきて、表にあった携帯電話や通帳などだけ押収し、その場では、隅々までの捜索もなく追及もされなかったようです。

しかし案の定、夜また警察が押しかけてきて、家中調べて、お金など色々持って行ったという事です。さらに、奥さんもその時、一時拘留されてしまったようです。これは、家にあった現金（押収分）や銀行のお金の動きなどから、薬物の量が足りない（もっとあるんじゃないか）という事になり、容疑者を問い詰めた（拷問した？）ところ、ヤクを隠している箱があることを自供したそうなのですが、容疑者を連れて行った直後の混乱している時に、誰か（仲間？）が家に侵入してその箱をとっていったのではないか・・・と近所の噂です。

もっとも（仮に）拷問などがあった場合、そもそもないモノをあると言ったりで、結局は、最初から、なかったのではないかと思うところです。が、警察は奥さんも共犯と考え連れて行ったようです。数日後奥さんは証拠不十分で釈放されたようです。

警察としては、手柄を自慢したい（住民から「警察 GJ、よくやった」を期待？）のか、あるいは自分たちの近所への横暴を正当化したい意図か、しょっ引かれる時も「コイツがヤクの元締めだ！」と言っていたそうです。（市中引き回しの様ですね・・・近所のみですが・・・）

今回、警察の不適切とも考えられる発砲があったり、近所も人も朝っぱらから私服警察に、暴言を吐かれた事があったようですが、幸い私のほうには流れ弾が飛んできたとか、警察が押し掛けてきた、一味と間違われて暴行を受けたとか、そういうのはありませんでした。

しかし、事が終わって考えてみると、本当に怖いと思います。
例えば、あの時、散歩や買い物で下に降りていくとき、ちょうどその場に遭遇して、仲間と間違われて、何か言いがかりをつけられたら？！また、私服の武装警察だったそうですから、こちらも危険回避で逃げようとしたら、発砲してくるかもしれません。早口のインドネシア語で捲し立てられ困惑していると暴行を加えられたりしそうです。そもそも、警察とチンピラの見分けもつかないかもしれません。

別にイ国の警察をこき下ろしているわけではないのですが、その近くで起きた状況としては、そういうイメージなのです。当然、本来の状況は違っていたり、単なる偏見かもしれませんが、窓からのぞいたり、聞こえてきた叫び声や罵声などから、そういうイメージになります。

外国にいると、ふとしたことから、犯罪に巻き込まれるかもしれません。
突然警察が押し掛けてきたり、なんだかわけのわからないことで逮捕されたり、劣悪な環境で長期間拘留される可能性もあかもしれません。もちろん、犯罪を起こして自覚もある場合もあるかもしれませんが、例えば全世界的・常識的に違法性はないがイ国の法律では特段有罪であるなどで自覚がない場合や、そもそも、違法なことをしているわけでもなく冤罪や言いがかり・・・などもあるでしょう。
もちろん、イ国には在留邦人もかなりいますし、日本から年間何十万人も旅行者が訪れていますから、その中で、そういう目に合うかというと 0.1%もないかもしれません。心配するレベルではないかも知れません。しかし、0%ではないことも確かであり、今回の一件も改めて、怖いなと思う機会になりました。

さて皆様におかれましては、携帯電話（スマートフォン等）に家族の緊急連絡先や大使館や領事館の電話番号は登録されていますでしょうか？また各種証明書などや重要情報などをメモしたもの、当面の生活の現金等を確保しておいたり、緊急時は日本やインドネシアにいる、ご家族などが各種対応をできるようにしておくことが日ごろから重要だと思います。

先の捕り物劇のように、預金通帳や現金も持っていかれる可能性があります。（もちろん潔白で関係ないと分かれば返してもらえると思いますが、、、）そうなると、家族は、当面の生活すらもままならなくなる可能性もあります。家族の携帯電話なども取り上げられてしまえば、連絡を取るのも容易ではありません。大変な状況に陥ることは確かです。

しかし本当に犯人であれば、警察がお金の流れをチェックする目的や取引の証拠だけでなく、押収・確保できなかった場合、証拠隠滅だけでなく、共犯者の逃亡資金になったり、家族までも共犯者だった場合は、仲間に連絡し、危険を知らせたり、ほかの証拠を隠滅するように指示するといった可能性もありますから、警察の対応を一概に批判するというのもできません。

仮にも、警察が押し寄せてきて、拘留される・・・ような可能性が出てきたら、常識的に、まずは、管轄の領事館や大使館に報告するというのがよいだろうと考えます。（もちろん、何か助けてもらおうとか、そういう期待よりも、問題に直面したという事を報告するという意味でです。最初から、助けてもらおうという意図で連絡しても、期待外れに終わる可能性も高いかもしれません。）

もちろん、警察が押し寄せてきて、瞬く間に連れていかれたという場合は、電話するような余裕はないと思いますが、このような場合でも、警察に領事館へ連絡するように要求する事は、大事であろうと考えられます。また、日ごろからも、もしもの時を考慮して、事前に家族や周りの人間に、自分に何かあった（逮捕なども含めて）場合、領事館へ報告してくれという手順を作っておくことや、そういった連絡先をメモっておくこと、さらに、日本人会や周辺に在住している邦人との日ごろからの、コミュニケーションも大事だと考えられます。

ただし、本人か身近な人が、本人が警察に逮捕されたことを領事館へ報告したとしても、一番大事なことは、冷静にならなくてはならないと思います。

また、領事館の対応としては、外務省の発行しているパンフレットの「海外で困ったら」のできないことにもありますが、これだけ見れば、ほとんどが確認・連絡業務と相談や情報の提供であることが分かります。あまりに過度（国家の力で減刑させたり釈放させるなどといった）な期待は当然できません。

（参考 https://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pamph_02.html　2019/07/31 現在）

人によっては、なんとも頼りない感じを受けるかもしれません。しかし、それであっても、領事館から、現地警察へ邦人が拘束されている事の照会があれば、現地警察も、慎重にならざるを得なくなり、「仮に」現地人に対して、拷問や暴行（結果、後遺症を負ったり獄死などにつながる）などを平然としているような場合（噂で聞きますが、実際に行っているかは定かではありませんが、、、）でも、現地人の時のように適当な理由をつけてうやむやにもみ消すとい

うのも簡単ではなくなります。もちろん、これらの可能性が 0 になったり、全ての場合において有利になることはなくても、警察も行動の前にワンクッション考えることにつながるかもしれません。

もちろんこれらの効果は、私をはじめ誰も、保証もできませんし、逆効果になる可能性（例えば、国家間の問題に対して、報復対応や人質として扱ったり、死刑廃止国の外国政府から死刑の廃止の要請に対して毅然とした対応を見せつけるために敢えて厳罰にしたと思われるようなニュースなども実際にあります。）もあるかもしれません。

何れにしても、可能性は極めて低い事ですが、たとえ無罪でも、拘留されたりすると、劣悪な環境だけでなく精神的な苦痛などにより、健康にも影響することが予想されるので、日ごろから、怪しい話や危険に関わらないことが先決で、さらに危険から避けるようにすることも大切だと思います。

また、万一の時の手順については、日本国内でも家族で地震の時の申し合わせ（例えば、〇〇を持って逃げよう。〇〇学校の体育館、そこがだめなら〇〇公園に集合しよう・・・など）をしたりしたことがあるかもしれませんが、それと同じぐらいのレベルで、一度、考慮しておいた方がよいかと思ったところです。

地震の備えと同じです。もちろん、周到に準備や対策をしておいても、実際に事が起きたときに、どこまで有効か、活用できるか、は何とも言えませんが、危機管理意識があるのとないのとでは、結果は違ってくるでしょう。

※違法薬物で捕まった近所の人については、裁判は始まっています。

5g 以上の覚せい剤が見つかったこと、精密秤や小分け袋などから販売目的であること。

さらには過去にも薬物所持で捕まっており、売買についての部分は証拠不十分となったものの 1 年以内の刑期になり前科があったことなどから、やはり 20 年ないし終身刑のような求刑が出ているようですが、何らかのコネによって 10 年は無理だが 11 年程度なら可という流れになっているという噂です。それでも家族らは当初 2 ～ 3 年になると見込んでいたようでかなり落胆のようです。（しかし、その話も「あくまで」検察までで、裁判官までは、まだ話が通ってなく、検察の求刑以上の刑期になる可能性もあるとの噂も・・・イ国では、裁判官の判決では検察の求刑以上になることも珍しくないといいます。）

なお、違法薬物も個人使用目的かつ少量の所持で初犯は、お金で解決？！や執行猶予、短い刑期の場合もあるようですが、何れにしても、健康上の問題も多々あり、依然、罰則は厳しく、国外退去にもなったりもしますので、間違っても、手を出すのは、やめましょう。

ボルティム旅行記

今泉　宏

マナドからあまり遠出されない方にはあまり知られていない地域だと思いますがマナドの南西方向にボラアンモゴンドウという県があります。短縮してボルモンと言われていますが、県庁所在地のコタモバグ市というと聞いたことはあると思います。そしてこのボルモンの東側海岸沿いをボラアンモゴンドウ・ティムール（東ボラアンモゴンドウ）県といい、短縮してボルティムと呼ばれています。

近年、インドネシア各地の道路が広くきれいになってきていることを皆さんも実感されていると思いますが、ボルティム方面の道路も随分きれいに舗装され車で走りやすくなっており、ここ数年の好景気も手伝ってボルティム方面のビーチに多くの観光客が訪れるようになっております。

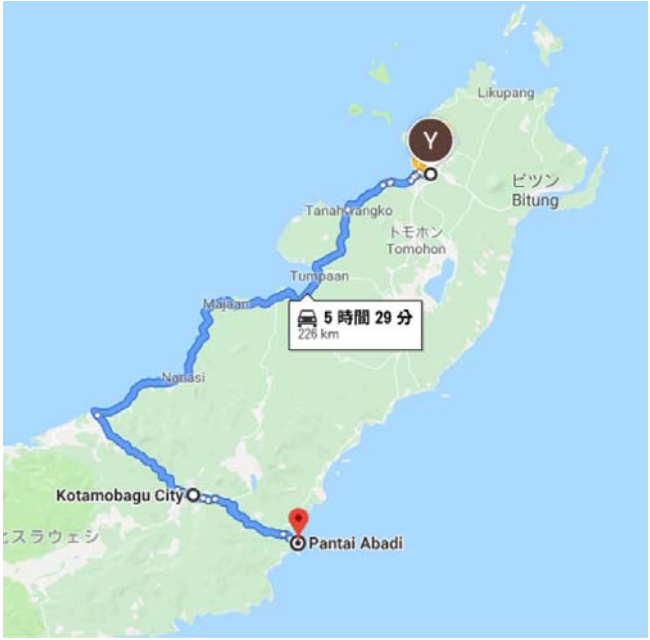
実はこんなに便利になる以前ひどい山道をガッタンゴットン車に揺られボルティムのマタブルという村にあった真珠養殖場へ通っていたのですが、当時この辺りがこんなに人の訪れる観光地になるなんて想像もしていませんでした。私に先見の明があったらこの辺りの土地を買い占めていたのになぁと今となっては手遅れですが、ていうかそんな金ないですけど(笑)。

１、２年ほど前に親戚がこのボルティムのきれいな砂浜や奇岩の多い場所をフェイスブックに掲載していて、聞くと養殖場のあったマタブル村のすぐ近くということが分かり、道路もきれいになっているらしいということで少々遠いけど家族連れで行ってみることにしました。

ここへ行くには２通りのルートがあります。１つはトモホン、ラゴワンを経由して東海岸へ出たのち南下するルート。もう１つはタナワンコ、アムランを通り北の海岸沿いを西へ向かい途中から南下しコタモバグを経由するルートです。いずれにしても４、５時間はかかるので近くの町で一泊して翌日の朝から観光をするのがよいでしょう。東海岸ルートであればコタブナンという町に数軒の安宿があります。北のルートであればコタモバグには安宿から少し高いスータンラジャホテルもあります。

私たちは土地勘がなくグーグルマップにも宿があまり載っていないコタブナン経由より、少し遠回りだけど確実にホテルがあるコタモバグ経由を選びました。昼過ぎにマナドを出発したのですがあちこちより道をしながら行ったのでコタモバグまで６時間ぐらいかかってしまいました。以前マタブルに通っていた頃に使ったことのあるタマシャというホテルがありますが、今でも健在で行ってみたら建物は古いけどそこそこ清潔で温水もしっかり出たのでここに泊

まりました。



翌日は早起きして８時過ぎには出発しジコモロボック(短縮してジコ)を目指します。コタモバグから南東の方角にずんずん進むのですがこの道がものすごい起伏が激しくクネクネ曲がりながら山道を登ったり下ったりを繰り返します。途中小さな村がいくつかあり金の違法採掘場や丁子畑の中を通り抜けていくとやっと海が見えてきます。海が見えたらあとはずんずん下って行くと最後に十字路にぶつかり右に行くとヌアンガン村、マタブル村、左に行くとコタブナン村、まっすぐ行くとジコに出ます。ここまで２時間ほどかかったでしょうか。昔はひどいでこぼこ道だったけどすっかりきれいに舗装されていたので思ったよりは楽に行けました。

ジコに着くと村の入り口に人がいて、観光ですかと尋ねられそうだと言うと船着き場まで案内してくれます。そこからエンジン付きの大きめのカヌー（彼らは普段マグロ漁に使っている）に乗りかえ風光明媚な海岸を眺めながらパンタイ・アバディビーチに向かいます。料金は一人３万５千ルピアです。この海岸線はまさに昔ボートで通り抜けていた場所なのですが当時はこの美しい風景には目も向けず素通りしていました。ほんの５分か１０分程度でパンタイ・アバディに着きます。砂浜は白くて粒がとても細かくサンゴのない砂だけの部分が広がっているのでとても泳ぎやすいです。波が高くて泳ぐにはためらいましたが少し入ってみると胸ぐらいまでの水位の位置で波にもまれていてもそれほど危険もなく小学生の子供でも楽しめました。以前この海域で養殖をしていて強く感じたのは透明度が断トツによいことでしたが、それ故動物性プランクトンも少なく肌がかゆくなることもほとんどありませんでした。また、近辺に住民が少ないこともありますがゴミが圧倒的に少なく砂浜にはゴミがまったく見当たりませんでした。砂浜から少し歩いて行くと奇岩の連なるセルフィ―スポットが多くありインスタグラムやフェイスブック好きの若者やおばさんたちに人気です。

少し遊んだ後ジコ方向にカヌーで戻って穏やかな海岸へ行くと数件の海の家が建っていてそこで焼き魚など食事をとることができます。この時は大人８人が腹いっぱい食べて４０万ルピアぐらいだったと思います。ここで食事の注文をしておいて少し丘を登っていくと見晴らしの良い岬の先に出られ、岬の脇には岩の割れ目にできた小さな砂浜があり、ここも絶好のセルフィ―スポットになっています。波も穏やかなので魚が焼きあがるまで写真をとりながら海水

浴をするのもおすすめです。海水浴をしたら有料（真水２０リッターで１万ルピア）ですがここでシャワーを浴びておいた方がよいでしょう。ジコに戻るとシャワーを浴びる場所がなく民家の裏にある水槽にたまった水をバシャバシャかけて家の影でササっと着替えなくてはいけません。もう少し賑わって村が潤ったら公衆のシャワー室やトイレなどもできるといいですね。ていうか小さな土地買って有料シャワー室作ったら結構儲かりそうです(笑)。

さて、思いっきり遊んで疲れ切ったら皆さんは車中でぐっすりとなるのでお父さんはひたすら走り続けるのみです。用事が無ければコタモバグでもう一泊したいところでしたがこの日は一気にマナドまで走り切りました。コタモバグの少し先にパイナップル村があるのでお土産にパイナップルというのもよいかと思います。値切らないとマナド並みの値段を言われるのでみなさんしっかり値切りましょう。

そして翌週、今度は東海岸ルートにあるコタブナンに友人の親戚がおり是非家に遊びに来いと言うのでそれならばと２週連続でボルティム旅行に行ってきました。今回はトモホン、カワンコワン、ラゴワンと通り抜けて行きます。そして後から確認して分かったのですが実はその先のラタハン村には日本人会会員の砂川さんが住んでおられました。電話で話を聞いてみたら車で通り過ぎた大通り沿いだったので今度は是非寄らせて頂こうと思います。ラタハンを越えたらベランです。そしてラタトトックを抜けコタブナンに着きます。確かラタトトックの辺りだったと思ったのですが少し売店で休憩をして立ち話をしていたらその向かいの家に日本人が住んでいるという話になり、詳しく聞くと戦前に移住してこられた日系の二世の方のようでした。お会いしたかったのですが夜も遅かったので帰りにと思ったのだけど結局別ルートで帰ってしまいお会いできませんでした。今度行く時には是非お会いしたいと思います。このルート

はとにかく山道ばかりで距離的にはコタモバグルートより近く、舗装もきれいなのですがクネクネ道がたいへんです。この日は夜に宿に着いたのでさっさと寝て翌日に備えます。

翌朝、コタブナンの先の島にきれいなビーチがあるというのでそこへ行きたかったのだけどあいにくの南風で島へ渡るのは断念しました。タンジュン・ヲカ岬ならよいというので行ってみたけどやはりこちらも南風がひどく大波が立っていました。それでも中学生の娘たちは逆に大波に喜び岬脇の砂浜で海水浴を楽しめました。岬の先でも大波をバックにセルフィ―を撮りまくり昼頃まで遊んで帰りました。やはりこのビーチもシャワーがなく仕方ないので濡れたまま車に乗り宿へ帰りました。毎回シャワーと着替えに苦労しているので次回までにはシートで囲って着替えができるような仕掛けを考案しておきます(笑)。

このままさらに南下すると先週のジコに到達するのですが今回は山方向に舵をきりモドインディン（南ミナハサ県）という高原の町を目指します。マナドートモホンとは比較にならないぐらいの山道をガンガン走るとアトガ・リバー・ヴューという新しくできた観光スポットがありました。これは最近トモホンやトンダノなどにもできている山の中の切り立ったような場所で空中に浮かんでいるような状態で写真を撮れるようにいろいろ工夫してあるセルフィ―のための施設です。まあ、こんな遠くまで来てこの写真を撮りたいと思う人は少ないと思いますが少し休憩するにはよいのではないでしょうか。さらに山道を走るとモアット湖があります。ここまでくるとかなり気温も下がりますが、後で調べたら標高は１０００メーター以上あるそうです。ここもセルフィ―のためにいろいろ工夫していて花が多く植えてあり、時期にはイチゴも食べられるようです。そしてさらに標高を上げモドインディンに入ります。この町はトモホンのように高原野菜がよく取れるようで道路脇に机を並べて新鮮な野菜が大量に売っています。ご想像の通り私の妻は安い安いと言ってキャベツや白菜、ジャガイモ、トウガラシなど大量に買い込んでいました。この辺りで日が暮れ宿を早く探さなきゃいけなかったのですがグーグルマップに唯一載っていたモドインディン・ロッジは部屋数が少なくモアット湖畔で見かけた宿も閉まっていて途方に暮れていたのですが地図を見ると意外にもコタモバグがすぐ近くにあり道もしっかりしていそうだったのでそちらで宿を探すことにしました。モドインディンからコタモバグまではほんの１時間ほどでした。当初の予定ではモドインディンで１泊してそのまま山道をほぼ真北に進みアムランに出るというルートを考えていましたが、これは次回にとっておきます。

ほんの 10 年ほど前には東ボラアンモゴンドウ県と言えば陸の孤島のような地域で、コタモバグからジコまで行くような人は一般人ではほとんどいなかったと思います。それがこの数年の間に道路が立派に整備され一般の観光客がぞくぞくと訪れるようになっているのです。今まで陸の孤島だったため都市近辺の海岸とは違い本来の美しい状態を保っている海岸が多くあり、これは北スラウェシの宝だと思います。今後も観光客は増えていくと思いますが政府や地域住民がしっかりと管理して美しい自然を守っていってほしいと強く願います。

土地の測量と登記

中村　高太郎

最近、インドネシア全土で土地の登記プロセスを盛んに行っており、7 月のジョコ大統領がマナド訪問時にも 3000 もの土地証明書を持参してきたなどと（宣伝）報道され、国家政策として力を入れているようです。このようなことは国家としても、税収にもつながり、土地計画も円滑にでき、土地を巡る住民間の無駄な紛争の抑止にもなり、良いことだと思います。

会社や工場等を作る場合は、使用権や建設権で外資系企業や外国人でも条件を満たせば問題はないと思いますが、配偶者がインドネシア国籍（私の場合もそうですが）という場合で、インドネシア人配偶者が土地所有者になる場合が問題になります。これは、婚姻により自動的に共有財産となりますから、外国人配偶者は土地を含めた財産を相続する可能性が出てきます、外国人は土地を所有できない為、この辺も問題になります。外国人と結婚するとインドネシア人配偶者は（事前に財産を分離する宣誓していない限り）土地の購入もできないという話までありました。婚前から既に土地を所有していた等で、外国人（二重国籍者も含めて）が土地を相続した場合でも、1 年以内にインドネシア人に譲渡する等で所有権を手放さなければならないようです。（結局は外国人名義で土地の「所有」は、現在も不可能という事になります）

参考：インドネシアの不動産利用制度 - ジェトロ　（P4 の 1 行目）　2019/07 現在

https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000183/indonesia_estate.pdf

上記資料は、土地の種類なども概要が書いてありますので、ご覧いただくと、インドネシアの土地に関する制度の参考になるかと思います。もちろん、本投稿記事や引用した参考情報などは、すべて自己責任でお願いいたします。法律的な面も、ご自身でご確認ください。

インドネシアの土地の権利は、色々な種類があって複雑怪奇なイメージですが、皆さんの土地（配偶者がインドネシア人の方や、工場所有者など）もどういった権利になっているか、一度、確認されてみるとよろしいかと思います。土地の権利書や有効性などは、土地の登記などを担当する、ATR/BPN 省（こちらの人たちはアグラリアと呼んでいる）の地方事務所で確認することが可能ですが、最近ではスマートフォンのアプリからでも確認できるように整備されてきています。

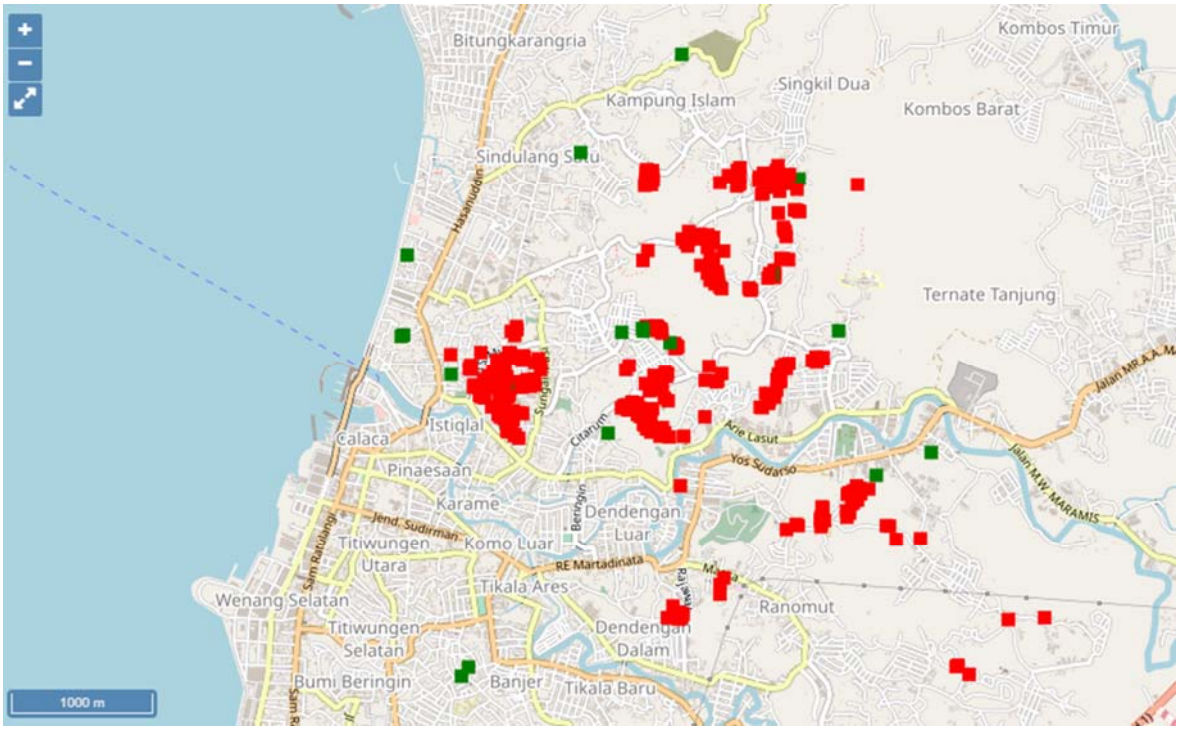
参考：Sentuh Tanahku　Kementerian Agraria Dan Tata Ruang/ BPN　2019/07 現在

https://play.google.com/store/apps/details?id=id.go.bpn.sentuh

測量と登記の実態は、、、

３月末ごろ、自宅近隣のエリアも冒頭の土地の調査と証明書発行のキャンペーン？！がありました。（といっても証明書は測量が終わってもすぐには出ないようです。）

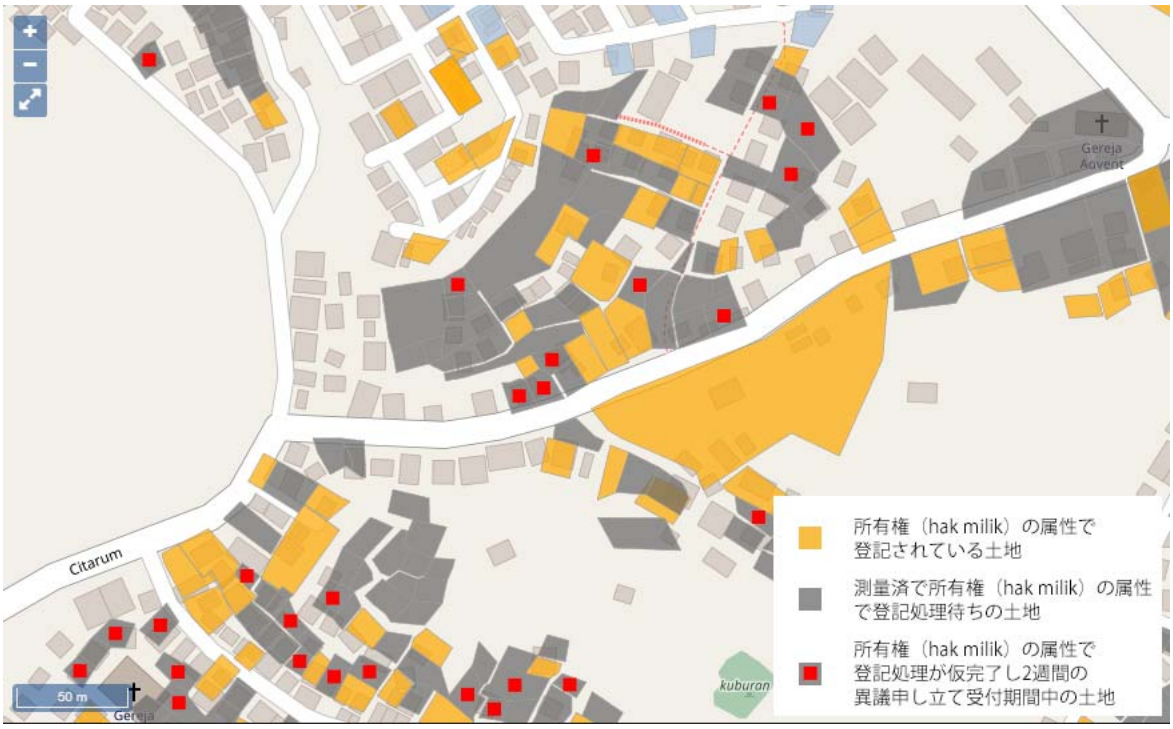
ATR/BPN の情報を見てみますと、ジョコ大統領からせかされているのかインドネシア全土で急ピッチに測量と登記の処理が進んでいるようです。



参考：↑自宅のある Kec.Singkil 区の ATR/BPN での土地の登記状況

↓自宅周辺の拡大図（自宅周辺も Hak milik が増えてきている）

※■マークは、土地情報が入力された後、２週間の間、異議申し立てを受け付ける土地



※■があるエリアは処理が活発であるという事が言えます。今年初頭は、所有権等の設定された土地はまばらで、処理が仮完了して２週間の異議申立期間に入った「■」マークもあまりありませんでした。しかし、ここ数か月でかなり表示されるようになりました。特にプルマハン（住宅エリア）ごとに重点的に測量と登記が行われているようです。

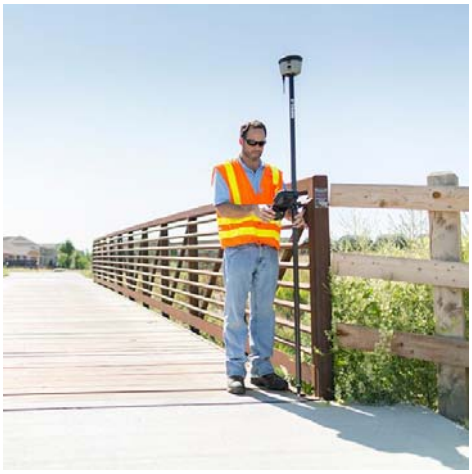
毎日どんどん登録と更新されていく、、、

情報を見る限り、日々、非常に速いペースで測量と登記処理が行われているのが分かりますが、一方で、後述しますが、測量や登記上で「何か問題がある場合」でも、実際この情報にアクセスでき異議を申し立てることが出来る能力を持った住民がいかほどいるか・・・です。さらには、適切なタイミングで適切な異議申し立て先に異議申し立てをできるか、さらに、異議申し立てをして、まじめに取り合ってくれるか。・・・問題がある場合は気が遠くなります。

自宅エリアの事例

さて、前掲の地図のように、私の家の周辺エリアにも ATR/BPN の測量スタッフがやってきましたので、その時の様子を書きましょう。

スタッフは、高精度 GPS 測定器（中国製のようなので北斗衛星＋GPS＋GLONASS か）をもっています。従来のような測量儀やトランシットのような大掛かりなものは持っていません。おおよそ右の写真のような装備になります。人数も２名（GPS アンテナを立てる係と、GPS の操作と座標の記録をする係）でした。



測量装置と測量イメージ

トリンブル社の製品イメージ写真

今回の測量風景ではありません

また、今回の測量は、周辺エリアの地域住民にすべてに土地の証明書を発行するということで、毎日数十軒回っているそうで、近隣住民もあわせて測量が行われました。

測量時は、近隣住民も後で文句を言わないように、立ち会う事になります。（幸い、近隣住民同士で、「はみ出してるやないか！」などのいざこざは起きず、平和裏に事は進みました）（周辺住民が立ち会いますから、当然、本来は事前に〇月〇日にこのエリアを測量するとアナウンスがあるのですが、インドネシアならではの、何度もドタキャンや、当日朝の告知などで、いつもの如く、どの情報が本当か分からなくなってきました。そういう事もあり、測量時に留守の住民も何名かいたようで、後述するように問題に巻き込まれているようです。・・・）

測量自体は、10 分～15 分程度でした。（昔は、測量となると、来てもらうために、交通費と称して、法外なお金を払ったり、食事まで用意していたといいますが、、、良い時代になってきたものです。まだまだですが・・・）

GPS の精度

なお通常の GPS は、数メートルの誤差が出ます。しかしこういった測量で使用される高精度 GPS は、おおむね 1 メートル以内の誤差（サブメーター級の精度）になります。（実際のところ数センチ～１０センチ程度の誤差になるようです。）普通の GPS に比べ非常に正確ですが、測位に時間がかかります。また、数センチの誤差といえど、例えば、広い土地（一辺が数百m とか）で四隅だけ測定していては、たとえ数センチの誤差でも大きな差になります。誤差を減らすためには、こまめに測量したり、トランシットとの併用など複数の手段での測量の必要があるかもしれません。

なお、我が国、日本は、GPS 衛星を補完する目的と精度向上の目的で「みちびき」衛星を打ち上げていますが、それに対応した高精度 GSP 測定器では、サブセンチ級（1cm 以内）の精度で測定できるという事ですから、非常に高精度な測量が可能です。この辺でも、日本政府が、国際協力などを通じて貢献（貸しを作る？！）する事もできるかもしれませんね。

数センチのオーダーで精度は大丈夫か・・・という心配もありますが、そういったことは、などはさておいて、土地の登記作業などが、簡単に行えるようになって、便利な時代になってきました、、、しかし、やはり、問題も発生しているようです。

本来土地の登記は、売買証明書の提出や、親類などの証言や証人などでその土地が自分のものであることを事細かく証明していかなくてはならなく、親類など関係者の中で異を唱える者がいたりすると大変で、そうでなくとも、複雑で手間とお金（賄賂とは別に、親類らの証言や同意などをとるのが何度も行き来したり心付けなど大変、、、）がかかるものでした。

お手軽になってきたが、、、

今回の、土地の登録キャンペーン？！では、（我々はもちろん、事前に購入前の土地の証明書や、その前の主の時の売買証明書、さらに購入後の測量図、購入時の売買証明書など一切合切を提出していましたが、）一部の住民は、測量時に測量スタッフに単に KTP（身分証明 ID カード）と KK のコピーを提出しただけの住民もいて、その住民も無事に完了しているようです。ただし完了していないもののほうが多い。基準も明確でない。またキチンと売買契約などの書類を出したものが、いまだに完了していない方も存在する。

さらには、可能性として、測量時に不在の家で、その方が、近所との折り合いが悪いなどで、数名の住民も結託して、私のものだと KTP や KK を提示すれば、理論上は、他人の名義で登記

されてしまうという事も起こりうるかもしれない。

実際に、近隣では、前述のように近隣の折り合いが悪いわけではないのですが、その時、たまたま、不在の人がおり、隣の住人の土地に併合合併された形で、かつ、隣の住人名義になっていた、、、などもあります。その、土地が増えてしまった家隣の住人も、「やった！！、隣の家の土地の権利まで自分のものになってしまった、ラッキー！！」というわけには当然行きません。そんなことをすれば村八分でしょうし、自分のミスでもないからと、何もしないでいると、「だんまり決め込んで自分のものにしようとしている」などと陰口をたたかれるかもしれません。今回の場合は、土地がなくなった家の奥さんが、その隣の家の方に、町内会長（パラ）や町長（ルラ）に説明してくれと言ったようです。

日本では、「異議のある本人」が証明書類をもって、関係事務所（ここでは ATR/BPN のマナド事務所）に行くのが正しいルートですが、不本意にも ATR/BPN スタッフのミス？等によって、隣の土地までくっつけられてしまった家の方も、これでは、とんだとばっちりです。

（おそらくインドネシアでも、昨今、正しいルートとしては、異議のある本人が、そうするべきだと思われますし、最近のルールが整ってきた状況では、パラやルラのところにもっていっても、埒があかないと思われます。）

自分で手続きしない（しようとしない）人たち

インドネシアでは、従来は土地に限らず、いろいろな申請や手続きは、役人から金銭を要求されるなど、大変な作業でした。それゆえに出生届を出していない人、身分証明書を持っていない人など、昔は、多数いました。しかし最近は収賄はなくなってきました。ですから、お金のない人でも、自分で役所に行き申請すれば、表示された金額で手続きを行うことが出来る時代になりつつあります。（それでも、全てがそうではありませんが、途上ですね）

しかし、お金はかからなくなってきたといっても、役所は専門用語やルール、法律の世界ですから、往々にして、ずぼらな性格と、無知（学習意欲がない）な人は敷居の高いものとなっています。もちろん、ある程度の常識があり、きちんと質問すれば、向こうも答えてくれるようですが（ただし日本の役所と違い役人の知識も豊富とは言えない）、質問が間違っていたりすると、答えに一向にたどり着きません。

このようなとき「彼らは知っているのに意地悪だ」という結論で終わることになります。

こういった役所のお堅い庶民的でない対応は、日本の区役所や税務署などでは何十年も前から、大幅に改善されてきましたが、それでも、なお（一般の人の馴染みのない）入管などに行くと、日本人の旦那さんと思しき人と、お相手と思しき〇〇〇〇〇人のカップル？が「結婚したんで、ウチのヨメサンのビザがもうすぐ切れるから延長してくれ」というと、「査証は延長できません」と言われて、押し問答しているのを、見たことがありますが、同じようなもので

す。（さらには、「査証はうちではどうにもならない、外務省か査証を取得されたところの在外公館に聞いてくれ」などと言われへんな方向に話が行く可能性すらあります。）

常識的に考えれば、（査証免除国を除く）外国人が日本に入るときは大使館とか領事館で事前に査証が必要ですが、日本に入国する際、査証はボイドされ（当然、数次査証はボイドされないが、、、）、同時に短期滞在など何らかの在留資格が与えられます。さらややこしい（わけでもありませんが、、、）のは、査証（在外公館・外務省）、在留資格（法務省、出入国在留管理庁）が発給・管理しています。入管職員も「あぁ、この人、在留資格の事をビザと言ってるのか・・・」ぐらいは当然分かると思いますが、だからと言って「はいはい、Ok、ビザを延長しましょう」と言って在留資格更新手続きに入るわけにもいきません。さらに、結婚したという事なので、在留資格も別の物から日本人の配偶者等に変わることが考えられますから、延長ではなく行進が正しいとなるかもしれません。キチッと「結婚したので在留資格を日本人の配偶者等に変更したい」と言ってもらわないと困ります。複雑ですね。
※上記カップルの場合は、ちょっと怪しい感じもありますので受理されても変更が許可されるかどうかは別問題ですが、、、

こういった用語の、細かい部分で誤解や齟齬が生じたり、受け付けてもらえたり／もらえなかったりは、日本だけでなく、インドネシアの入管でも似たようなものはあると思われます。

話を戻すと、、、

話はそれましたが、「インドネシアは改善されつつあるものの改善途上であり、ある程度の知識（常識）が必要だが、一個人でも手続きが可能になってきた。」一方で「とはいうものの、人々の認識や、お役所という威張っているというか堅いイメージ、単にやる気、努力、向上心がいまいちで、まだまだ、敷居の高いものだ」という事になるかと思います。

色々問題は多そうであるが、今後に期待

さてさて、隣の家の土地に併合されてしまった家の土地が、現時点で、どのような方向に進むのかは、現時点では、分かりませんが、コンピュータ上のデータは変わってないようですので、確定されてしまったのかもしれません。

配偶者の方がインドネシア人で家の土地が、証明書みたいなものは手元にあるが、どうなっているかよくわからない、とか、工場を持っている等の場合、その土地が、どのように登録されているか等、一度、確認してみると、よろしいかも知れません。

インドネシアでは、最新技術を使って、フットワークが軽く、サクッと土地の登記を進めていますが、何ともインドネシアらしい、粗削りといいますか抜け道も目立ちます。

日本では、何か月～年単位で事前評価や試験運用を通して初めて、導入されるもので、色々な抜け道をふさいでおり、どうにもならない人たちが出ないように、配慮されています。その代わり、導入はすぐではなく、ゆっくりとしています。

インドネシアでは、土地だけに限らず、あらゆる手続きが急速にオンライン化されつつあります。PC やスマートフォンから、アプリや Web サイトで簡単に手続きができるようになっています。また、手続きの進行状況も確認できるようになっており、大変便利です。

しかし一方で、従来、書類で提出していたものが、手続き方法自体が無くなってしまい、オンライン申請のみとなってしまう事すらあります。こうなると、PC やスマートフォンを持っていない人や、高齢者など情報機器に弱い人にとっては、非常に難関になってきます。

更にバグなども多く、途中でタイムアウトや、特定の入力パターンでエラーが発生して最初から入力しなければならないとか、どうしても申請が途中で止まってしまうなど、そういった利便性の問題も十分テストされずにリリースされているようでイマイチです。

他にも、セキュリティの問題や、申請番号などが単純な連番で、しかも、申請番号を入力するだけで照会できる場合、他人の申請内容が覗けてしまうような、プライバシーの問題もあります。（最近はだいぶ改善されてきましたが、それでも、日本の感覚では問題となる際とも多いです。）

こういった、抜け道にハマって出口が見えなくなると大変です。この辺は、年々改善していくものと思いますが、なんとかなぁ・・・というところです。とにかく今後に期待です。

下関で捕鯨について考える

大貫　周明

皆さんこんにちは。

日本はIWCから脱退し7月1日から31年ぶりに商業捕鯨を再開しました。
このニュースが流れた時、ちょうど下関におりましたので、色々と思うところを書かせていただきます。（すべて個人的見解です。ご了承願います。）

僕の世代は、小学校の給食でクジラ肉は定番でした。でも、給食以外で食べていた記憶があまりありません。ここ下関でもクジラ料理の店はありますが、観光客用であり、普段、地元の人が食べに行くという感じではありません。クジラ肉は美味しいのですが、無くても大丈夫というのが実際の感覚です。では、なぜ日本は捕鯨にこだわるのでしょうか。IWCを脱退してまで捕鯨を続ける理由は何でしょうか。下関でよく見かける捕鯨促進ポスターには、大型の鯨類の資源は充分回復しており、オキアミや小魚が大量に食べられ過ぎており生態系に悪影響が出ている、だからある程度は獲らなきゃダメよ。という主張です。

かたや、欧米の反捕鯨の人達の主張は、クジラは減っており絶滅しそう。知能の高い特別な動物だから、一切捕獲してはならないというもの。この主張には全く賛同できないです。ただの感情論だから。

かつて日本はクジラがなくては生きていけなかった時代があり、捕鯨が生活に密着しておりました。その為、捕鯨やクジラ食を大事な文化と認識している方も多いです。

各新聞記事などを読んでいきますと、今回の商業捕鯨の問題点としては、漁獲許可された頭数 227頭ではとても商業捕鯨とは言えないレベルである。
漁業として成り立たない数量とのこと。昔は8,000頭程を獲っていた
（最近の調査捕鯨でも660頭程を捕鯨していたそうです）

・調査捕鯨のクジラ肉って余っている？

高価で食べる人が少なくなり、調査捕鯨のクジラ肉が余っているという話を聞いたことがあります。下関のクジラ肉扱いの業者と話したところ、実は、この噂は正しくなく、在庫は不足しており、アイスランドから輸入しているとの事でした。

・捕鯨業界の限界？

調査捕鯨では年間３５億円が調査資金として国から提供されておりました。

近年の捕鯨は補助金で成り立っていたのが実態なのです。

現在のクジラ肉の需要はマーケットも小さく、食べる人も少ない。

つまり、業界は一度消滅した需要を喚起して商業化しなければならないところから始める必要があります。これはしんどい。何年もかかります。

日本が捕鯨を続ける意味は？ ちょっと違う視点で考えてみた。

①政治的アピール

日本の捕鯨拠点は山口の下関市と和歌山の太地町です。安倍総理と二階幹事長の地盤です。確かに、二階幹事長は IWC 脱退に熱心に動いていたので、少しは理由としてあるかも。

②食文化

日本では、かなり昔から食べられていたようですが、特に敗戦後の食糧難の時代、安いクジラ肉は国民食でした。当時は牛・豚・鳥よりも多く消費されていたそうです。そう考えると、日本人にとってクジラは大事な食べ物。

あたりまえに食べていたクジラ食文化をこのまま消してよいのでしょうか。

③他には、何だろう。。。。ありました！

現時点での捕鯨国は日本・ノルウェー・アイスランドです。つまり、他の国の人は食べていない。つまり高栄養価の動物性タンパク質として考えた時、食料の安全保障（自給率）の観点から、国家戦略的に大事な食料になる可能性があります。食料不足が懸念されている昨今、資源管理を行いながら漁獲をすれば安定供給できるタンパク質だと思います。（中国人がクジラを食べだしたら終わりますが）少なくとも、僕は昆虫食よりはクジラを喜んで食べますよ。

・最後にクジラ肉への疑問。安全か？

よく、食物連鎖の高い位置にいる動物ほど、汚染物質が生物濃縮されており、体に良くないという話があります。南氷洋などは海洋汚染は少ないでしょうが、商業捕鯨は日本の領海内で漁獲します。日本の海で獲れるクジラは大丈夫でしょうか。そこだけちょっと気になります。

以上

下関のあるかぽーとに停泊中の日新丸

小坂清見著「わが青春のメナド」紹介

（編集部　長崎　節夫）

今回紹介するのは開戦直後から終戦（引き揚げ）までメナド（北セレベス）に勤務した一商社マンの回想記です。著者の小坂清見氏は、大学を卒業して京城の銀行にしばらく勤めた後、南洋渡航の夢を追い求めて東京に舞い戻り、「南洋貿易(株)」に就職しました。20 歳代半ばの青年が太平洋戦争中のインドネシア（北セレベス）で何を見て、何を考えていたのか。非常に貴重な記録を残してくれました。

本文の構成は下記のようになっていますが、今号では「第 3 部　漂流」までご紹介します。

第 1 部　開戦　（昭和 16 年 12 月より 17 年 3 月まで）
第 2 部　メナド　（昭和 17 年 4 月より同年 12 月まで）
第 3 部　漂流　（昭和 18 年 1 月より 19 年 5 月まで）
第 4 部　爆撃　（昭和 19 年 6 月より 20 年 7 月まで）
第 5 部　敗戦　（昭和 20 年 8 月より 21 年 4 月まで
第 6 部　帰郷　(昭和 21 年 5 月)
あとがき

・・

わが青春のメナド

小坂清見

第 1 部　開戦（昭和 16 年 12 月より 17 年 3 月まで）

開戦前夜

その夜も銀座は人の波、光の波が溢れていた。

芝大門付近の「南洋塾」から神田まで腹いっぱいの興奮を抱えて歩きながら、私は一面醒めた目で、この人たちを眺めていた。「この人たちは今、何を考えているのだろうか」と。

当時、私は会社の帰りに南洋塾で南洋事情の勉強をしていた。その夜も 1 時間ばかりカンボジアの民族誌について講義を受けた。突然、講師席に臨席していた軍服の人が立ち上がって話しはじめた。

「明 12 月 8 日早朝、ハワイで米国に対する戦端がひらかれる。我らが待ちに待ったときが来た」と。

ワーッという悲鳴とも歓声ともいえる唸り声があがり、会場は興奮のルツボと化した。「ついては今日、今すぐ親とはなれ妻子と別れて軍と行動を共にする人は居るか？志ある人は今申し出よ。署名し血判しなさい」と。

「血判」とは一寸芝居がかっているが、この人は退役陸軍大佐で、木村陸軍次官（当時）の実父とのこと。話に嘘いつわりがあるとは思えない。私自身は何かあれば会社から派遣されるであろうと思っていたから署名しなかったが、南進を志す約百名の塾生のうち、三分の一くらいの人がその場で署名し、実際に血判したのには驚いた。

銀座八丁柳の下で、電車、バス、タクシー、自動車の騒音、人や光の渦のなかを私は心の中で「戦争だ、戦争だ」と叫びながら、人並みを縫って下宿に帰った。本当は大声で「戦争だ」と叫んで皆に知らせたかったが、もちろんそんなことができるわけはない。

ただ、神田錦町にある私の下宿のご主人に「明日の朝、戦争になるよ」と教えたが「そんな馬鹿な！」と一笑に付された。が、翌早朝、その主人に叩きおこされた。「戦争だ。小坂さんが言ったのは本当だ。ハワイで日本海軍が爆撃している」と。

その日まで

頭取以下に非常に可愛がられた朝鮮京城（ソウル）の銀行を無理に辞めさせてもらい、私はその年 6 月に上京した。26 歳。理由はどうしても南方に行って働きたかったからである。

当時の国際情勢は、同盟国ドイツ、イタリアはすでに参戦し、日本は「ABCD ライン」と称

される四方の国から石油禁輸などで締め付けられていた。今後の日本の運命は何れ南方にある、と私は思っていた。本来日本人は本能的に「南への誘惑」を感じていたように思う。それは日本人の祖先の一つの流れが南方から渡来した縄文人であり、あるいはその古里への回帰の想いかも知れない。

私は上京して濱町に本社がある「南洋貿易」という会社に就職した。この会社は大阪支店、横浜油脂工場のほか、サイパン、パラオなど南洋群島の各島に２０数か所の拠点（セレベス島メナドにも）をもち、主として貿易と代理店を業としていた。

この会社で私は管理部に配属された。ここで私がやった仕事は、岩井君という友人と二人で本・支店２０数拠点の５年間にわたる上期半期の決算書に基づく経営分析を行ったことである。分析の方法は当時米国で行われていた科学的手法によった。結論は次のとおりとした。

この会社の主業務である貿易や代理店業は、物資不足、公定価格統制などで業績不振となり、その流動資金が余るので会社はその資金を椰子園の造成、（パラオの）金山開発などに固定資金として注ぎ込んでいる。しかし、椰子が果実を生むまでには 10 年かかる。金山はいつ採算がとれるかわからない。したがって、このままの経営方針を続けるならこの会社は 3 年で行き詰る、と数学的に実証した。

この分析資料を社長以下各役員に回付したが、皆、あまりわからなかったようであった。事業部長だけは少しわかったようなことを言っていたが実際のところはどうであったか。事実、この分析に基づいた経営方針の変更はおこなわれなかった。

開戦の日

12 月 8 日、この日出社すると社内は興奮状態にあった。南進を志す社員の集合体の企業であるからやむを得ない。

正午、本社の社員は全員屋上広場に参集し、郷社長より、

「本日、宣戦の大詔が発せられた。我らが待ちに待ったときが来た。これよりは全社さらに一丸となって祖国と運命をともにしたい・・・・」

と、声涙ともに下る訓示があり、皇国の弥栄を念じて万歳を三唱した。

次の 2 か月でやった作業は、私ひとりで「東南アジアアウタルキー（自給自足を目標とする統制経済）」の問題研究であった。すなわち東南アジア各国合計の資源産出量と、各国合計の必要量との比較である。分析の結果、東南アジア各国がまとまり、有無相通ずれば、当時の量として各資源の自給自足は可能である、と結論づけた。

調査団

この私の研究資料が完成したころ、会社は南方派遣の第 1 回調査団のメンバーを発表し、各

団員は準備しておくように、と通達があった。私もその一員に選ばれた。

文野団長（事業部長）、稲垣副団長（大阪支店長）、宇野、郭明正、灰原各君のほか 2，3 名と私で調査団は構成され、嘱託として鉱山技師の石橋氏（日本鋼管）と機械屋の河野氏（横浜工場）が加わった。

文野団長は 40 歳すぎ、会社ではエリートである。稲垣副団長は元・メナド支店長。同地に 30 年くらい在職し南方事情のベテラン。大変おとなしい紳士で 50 歳くらい。宇野君はながいことメナド市郊外のアムラン農園（1,200 ヘクタールの椰子園）で働き、30 歳くらい。郭君は台湾出身で 25 歳くらい、貿易学校卒業で非常な張り切りボーイ。灰原君はスラバヤ生まれの 20 歳くらい。当然、インドネシア語はペラペラであった。

別れの日

（中略）

出発が迫ったある日、その叔父に私は挨拶に行った。すると叔父は「この戦争は日本の負けだ」と言う。気が逸っている私は「何くそっ」と思って、その理由を聞いた。

「兵器製造技術が欧米より 10 年ないし 20 年おくれている。モノによっては 30 年おくれているものもある」「たとえば精密測定用計器（ゲージ）だが、彼らは日本より少し精度の高い計器を買わないか、と持ってくる。今までのものよりいいので仕方なくそれを購入して使用していると、しばらくたってそれより一段と精度の高い計器を持ってくる。持ってくる人はすべてユダヤの商人だ。馬鹿にするな、と思っても、この兵器製造に欠かせない基本計器は向こうのほうが良いのだから仕方がない。このように日本の機械技術は彼らに翻弄されている。さらに、艦船、航空機、自動車などの量産能力はけた違いに米国の方が上だ。まず日本の 10 倍とみてよいだろう。これでは日本が如何に精神力でがんばっても必ず負ける」と言う。

敗戦主義者じゃないか、と私は悔しかったが、何といっても叔父は日本有数の兵器製造工場の技師長である。私の知らないことを知る立場にあることは確かだ。私は黙ってこの話を聞くより仕方がなかった。

（中略）

出発に際して、私はインドネシア語教本その他の書籍、および父から送ってもらった日本刀（昭和刀）と「熊本毒消丸」を持参した。この薬はなぜか子供のころから私にはよく効くので、水の悪い南方へ行くというので父が特に送ってくれたものである。

服装は軍服まがいの国民服、軍帽、軍靴、ゲートル姿である。

変な話だが、「第一補充兵」である私は、兵籍をどうしようかと迷ったが、やむなく次の文面のはがきを私の本籍地である「仙台市兵事係殿」に送付した。

「私は今回、社命で南洋方面へ行く。パラオにはちょっと寄るが、それから先どこに行くかわからない。一応通知する」と。このはがきのおかげで本籍地からの招集令状は最後までこなかった。もっとも陸軍の現地招集は 3 回あったが、いずれも海軍が「必要人物」として断ったので、とうとう招集は一切なかった。

出港

昭和 17 年 2 月 11 日、神戸港は氷雨に濡れていた。セーターやオーバーを着込んでもなお寒い。寂しい船出。汽笛一声、いよいよ日本と別れの日が来た。

船は潜水艦の攻撃にそなえて時々ジグザク航行をし、救命具のつけ方の訓練などがあったが、当時は別にそのような危険は全然感じなかった。

パラオまでの 1 週間は外部から何の連絡もなく、仕事したくてもできない「絶対自由」、一生の中のポッカリ空いた空白の 6 日間であった。せいぜい先輩の話を聞いたり、インドネシア語の復習をした（私は前年の夏、南洋塾で 50 時間インドネシア語を勉強していた）

われわれ調査団には一等、二等、特二等の船室が割り当てられていたが、暇をもてあますと三等船室に行った。船は三等船室がおもしろい。ここではいろいろな人の話を聞くことができた。

パラオで材木商を営む人の奥さんと親しくなり、いろいろパラオの生活について話を聞くことができた。その中で特に興味を引いた話は、奥さんの家の島民の女中には珈琲は絶対に飲ませないとのこと。飲ませると興奮して気が変になるという。また、南洋庁令で島民は一切禁酒となっている。男たちが飲むと気狂いのようになり、乱暴をはたらくこともあるという。このように島民は刺激性の強い飲み物には非常に反応が早いようだ。

船室の一隅に沖縄の娘さんが 10 人くらいいて、蛇皮線を弾きながら沖縄の唄を歌っていた。

天（チヌ）から落ちたる糸満童子（ダーラ）・・・

眺めていたらやおら立ち上がって、ゆっくりした手振りで踊りだした。悲しい唄や踊り、彼女たちはこれからどこに売られてゆくのだろう。その踊りを見ながら哀れでならなかった。

パラオ

一日一日暑くなって、セーターやシャツを脱いでいった。6 日目、船はパラオ諸島に近づいた。静かなサンゴ礁の間を通りぬけてゆく。抜けるような青空、深い水底に虹を思わせる色の熱帯魚がひらりひらりと泳いでいる。島を見やればヤシの木が生い茂り、その緑の間に真っ赤なハイビスカスが燃えている。

会社使用の島民が一人、カヌーに乗って船に近づいてきた。真っ黒な裸の上半身に真っ赤なサロン、南の島は極彩色が似つかわしい。

調査団一行は南洋神社に参拝のあと、支店にあいさつに行く。会社経営のデパートの 2 階の食

堂でミルクコーヒーを飲む。室内を微風が吹き抜け、最高の気分である。夜になると南洋庁の役人などが盛んに料亭でさわいでいる。
話は変わるが、「比較言語学」という学問がある。それは、その土地その土地の言葉や数の読み方がちがうので、その違いを比較しながら人類の流れを見つける学問である。私はこれに興味をもち、南方にいけば調べてみたいと思っていた。
南洋群島はドイツ統治時代、5 人の役人で治めていたが、それでも島毎の言語の研究を多少はしていたと聞いていた。だが、わが国南洋庁の役人は 3,000 人いたが、この問題に関心をもっていないようでガッカリした。彼等は日本語を教えることに専心していた。
パラオに滞在中、私どもの「南洋貿易」は国の方針に従い「南洋興発」と合併し、新しい南洋興発となることになった。皮肉にも管理部で私が結論づけた「3 年で南洋貿易は経営が行き詰る」という私の危惧は、解決されたことになった。
南洋興発との合併を機会に、私は同社の藤沢、堀田両調査団員と仲良くなった。藤沢君は私より 5 歳年長、堀田君は私と同年、ともに男性的で愉快な人柄であり、私の終生の友となった。この友人と一緒に、3 人で朝鮮人の女郎屋に行ってみた。ただ、酒を飲みに行ったのだが、私は懐かしくなって朝鮮の太鼓を叩きながら、うろ覚えの朝鮮の唄をうたった。

トラジ　トラジ　ベツ　トラジ
シム　シム　サムチョネ　ベツ　トラジ

トラジ、連翹（レンギョウ）の花の唄である。チマ・チョゴリの朝鮮の娘さんたちがびっくりして目をパチパチしていたのは愉快であった。私はでたらめに歌いながら、春に京城の我が家の門から玄関までの両側に真黄色の花を咲かせた連翹を思い出していた。
調査団長と副団長はメナド渡航について忙しく軍幹部と話し合いをしていた。何しろ 1 月に占領したばかりの場所だけに、話はなかなか面倒のようであった。

（中略）

パラオ出港
4 月 5 日、やっと我々はパラオを出港した。10 隻くらいの船団を組み、先頭が 200 トンくらいの汽船、間に 8 隻くらいのダイバーボート（真珠貝採集の帆船）をはさみ、シンガリもやはり 200 トンくらいの汽船で構成された。
私どもは先頭の船に乗り込んだ。波ひとつ立たない海面を船は滑るように進んだ。敵潜水艦の恐れの全然ない当時なので、私どもはのんびりビールなどを飲みながら船旅を楽しんだ。イルカが船と競争するようにいつまでもついてきて、夜は夜光虫がキラキラ光っていた。

（中略）

第２部　メナド（昭和 17 年４月より同年 12 月まで）

ミナハサ

私どもの船団はセレベス島ミナハサ半島にあるメナド市に近づいた。

セレベス島はボルネオとニューギニアに挟まれたＫ字型の大きな島である。面積は 18 万９千平方メートル、大体、日本本州の８３％にあたる。この島の北部がミナハサ半島であり、その先端近くにメナド市がある。メナド市は人口２万人。東方にカラバット山（メナド富士）を望み、ミナハサ族が住む。

この民族の服装は都会風に洗練されており、その肌色や容貌は日本人に酷似している。日本人の子孫ではないか、「メナド」は「ミナト」の変化したものではないか、といわれるゆえんである。

オランダはその知的優秀性に目を止め、ミナハサ族をオランダ人と一般インドネシア人との間に位置付け、下級官吏などに多く登用した。また、キリスト教への教化につとめ、その９０％はキリスト教徒になった。（カトリックとプロテスタント半々）。ほかの一般のインドネシア人はほとんどが回教徒である。

この地方の産物としては、カポック、コプラ（椰子の果実を乾燥させたもの。油脂の原料）、コーヒー、にくずく（ナツメグ）、丁子（クローブ）などがある。果物はドリアン（果物の王様）、マンゴスチン（果物の女王）、マンゴ、ランプ―タン、パパイヤなど非常に豊富で、バナナだけで数十種類もある。

このミナハサの創世記は次のとおりである。

はじめ女神あり、東を拝して何事もなし。南と北を拝しても何事もなし。岡の上で西を拝したとき、沈む太陽が自分の体内に入るような気がした。やがて女神は妊娠し、男の子を産んだ。

やがてその子は成長し、親元をはなれて旅に出ることになった。その別れの日、女神は竹を二つに折って、その片方を杖として男の子に渡した。

何年か経ってある日、若い立派な青年が女神の前に現れた。二人はたちまち恋に落ちいり結婚した。

あるとき、女神は何気なく青年の杖と残っていた竹の折口を合わせてみると、ピッタリ合った。女神はおどろき、相手が自分の産んだ息子であることがわかった。しかし、今更しかたがない。そのまま結婚生活を続け、多くの子供をもうけた。その子供たちがミナハサ族の先祖であるという。

私が土地の古老から聞いたミナハサの創世記である。

落下傘部隊

私たちが上陸するちょうど３カ月前の１月１１日、わが海軍佐世保鎮守府陸戦隊の精鋭はメナドおよびケマの東西双方から敵前上陸を敢行した。これに呼応して同日の朝、ミナハサ半島ランゴアンの敵飛行場に落下傘部隊を降下させた。この落下傘部隊は海軍体操の生みの親として有名な堀内中佐を部隊長として編制され、「横須賀鎮守府特別陸戦隊」と称された。

落下傘部隊の第一中隊は鉄条網とトーチカで守られた敵陣の真っただ中に、フワリと真っ白な落下傘の花を降下刺せて行く。先頭の司令機は車輪を引っ込め、胴体着陸を敢行した。そしてその胴体を遮蔽物として攻撃を展開した。わが社の子会社「南太平洋貿易」の細谷メナド支店長も部隊長に続いて機体から飛び出した。

他の中隊は司令機の水上機がトンダノ湖に着水すると直ちに攻撃を開始した。

落下傘部隊は敵が待ち構えた飛行場の真ん中に降下したので多くの戦死者を出し、なかにはヤシの木に引っ掛かり撃たれたのもいた。戦死者の数は 33 柱と聞いている。

オランダ 300 年の制圧下、インドネシア原住民の間では、やがて大空から救いの神が現れるという昔からの伝説があり、落下傘の空に開いた大輪の花を見て、これこそが救いの神と感激し、食料を携えて兵隊さんを大感激でむかえたとのことであった。

この落下傘部隊は飛行場付近を制圧したあと直ちに北へ展開、メナドとケマから南下してきたわが上陸部隊と挟撃してオランダ軍を完全にこの地から駆逐してしまった。

メナド上陸

4 月 11 日、わが船団は無事メナド港に到着した。旧南洋貿易メナド支店のインドネシア人支配人・ヨハンがボートに乗って迎えに来て、（元支店長の）稲垣さんと久しぶりの感激の挨拶を交わした。旧南洋貿易は大正年間からこのメナドに椰子農園を経営していたのである。

上陸してすぐ近くに、古い城壁が残っている中央広場があり、大きなオオギヤシが目についた。葉が一列に扇型に生えているのでこの名があるが、その扇が必ず南北をさして広がっているので旅人の目印ともなり、「旅人ヤシ」の異名がある。

この中央広場がメナド市街の中心をなしており、まわりには華僑の経営する百貨店、インドネシア原住民の食料品市場（パッサル）、その他喫茶店や靴屋など雑多な店舗が立ち並び、わが旧南洋貿易支店の建物もここにあった。

わが社の社員が中心となり、同じ船団で同行した数十人がこの広場に整列し、列をなして民生部へ向かう。炎天下、完全軍装なのですぐぐっしょり汗をかく。民生部前庭で筆頭事務官の小林という人が訓示した。（この人は財務内務担当で実質上の民生部長）

「占領後 3 カ月、戒厳令下やっと治安が落ち着いたところである。各自、行動にはくれぐれも注意し、軍、官に協力すること」--- というような趣旨であった。

わが支店から私と郭君の二人だけ軍属となることになり、私は財務部門嘱託（尉官待遇）、郭君はミナハサホテルの支配人として勤務することになった。

わが社の社員宿舎として旧オランダ副理事官邸が指定された。机、椅子、ベッド、戸棚、食器など、生活上必要最小限のものはオランダ人が所有していたものを使用した。他の家具や道具類は敵産としてすべて地下室に封印し管理された。この地区の敵産管理は終戦まで厳重完全な形で行われた。

下男、下女も引き続き雇用した。

どこの家でも同じだが、天井にピッタリと数匹のヤモリが張り付いており、初めのうちは不気味であったがそのうち慣れて、全然意識しなくなった。

食事は、パン（ただし最初のうち）、玉子焼き、野菜、珈琲、果物などで、当時の日本の食事と比較すればまずは結構であった。それよりも、中央広場にあった中華料理店で、１円でたらふく料理が食べられた。おいしくて毎昼食べに行ったが、そのうち飽きて１週間で止めにした。

ちなみに、それまで現地で通用していた通貨、オランダの１ギルダーは強制的に１円の軍票と交換された（フィリピンの１ペソ＝1 円も同じ）。ずいぶん強引なやり方だと思ったが、そのうち物価が変動して結構これでもうまく行くものである。

市場経済は完全にタウケ（華僑の主人）が握り、百貨店、靴屋、織物店その他いろいろ経営していたが、品物がなくなったのかそのうち店を閉鎖してしまった。利口な彼らのこと、私は彼らが上手に物資を隠匿したと思った。

広場の中央にある市場（パッサル）はインドネシア人が野菜、果物、魚肉類、卵などを並べ、食料品は何でも売っていて大変にぎやかであった。

戦前は、オランダ人のトアン達はいばっていて、机がちょっと曲がっていても下男頭に直させ、靴紐がほどければ結ばせる。また、母屋には下男頭以外の下男、下女は入れなかった。

日本人のトアン達は概して使用人をかわいがり、ときには卓を囲んで一緒に酒を飲んだりした。それでインドネシア人はよく「ニッポンインドネシアサマサマ」、あるいは「スダラ」と言っていた。

４月 18 日、ドゥリットル少佐が指揮する B25 爆撃機部隊が米機動艦隊から発進して主力は京浜方面へ、他は阪神方面を空爆し、そのまま中国大陸を目指して飛び去った。これは米国が日本を空襲した最初である。

このニュースを耳にした機械屋の河野さんは、横浜の家族のことを大変心配した。この程度のことでも妻子を持つ身ではこんなに心配するものかと驚く一方、チョンガーの自分は気楽なものだと思った。

ある日のこと、官・民の代表者 2，30 人を集めて、民生部会議室で富田という参謀から爆弾が落ちてきたときの心得について話があった。「ニューギニアでの経験から鑑みて、耳を押

さえタコツボに飛び込むのが一番良策だ」とのこと。

この話があったとき、偶然にも「ドスーン」という大きな音がして建物が揺らいだ。ハッと思って見回すと、会場には人がいなくなり、残っているのは富田参謀と私だけであった。参謀はさすがに背をピンと伸ばし泰然と椅子に掛けていた。私は別に豪胆で座っていたわけではなく、何が何だかわからず動作が鈍かっただけである。

ヒョイと見ると机の下に稲垣さんがもぐっていて、耳を押さえながら早く私も入るようゼスチャーで示した。私もちょっと机の下に入りかけたが、何となくばかばかしくなってやめた。（中略）

後の話によると、偵察に来た敵機が民生部建物のすぐそばに誤爆したとのことであった。また、この頃、敵の戦闘機 8 機が襲ってきたことがある。当時、このミナハサにはゼロ戦がまだ残っていて、その 4 機が敵編隊の真ん中に突っ込んだ。8 機対 4 機！　無謀と思われるが、戦争当初、ゼロ戦はそのずば抜けた旋回性能から世界一の戦闘機と称され、搭乗員の操縦技術も伴って向かうところ敵なしであった。

このときも私たちの目の前で敵機はゼロ戦に追い立てられバラバラの方向に退散し、うち 1 機は墜落したとのことであった。

勢いにのったゼロ戦は得意満面、低空で宙返りを披露するなどデモンストレーション飛行を行い、喝采を浴びた。しかし調子に乗りすぎ、1 機が田んぼの中に突っ込み、ひっくり返ってしまった。幸い、搭乗員は軽い怪我程度で済んだようだ。

ある日、わが南洋興発の栗林社長が秘書課長を連れてメナドの立ち寄ったことがある。社長は当時貴族院議員であったが、貴族院議員とはエライもので、警備隊指揮官がつきっきりで案内してまわった。またこの夜に秘書課長は私の宿舎に泊まってもらったが、これが後日、私は彼に助けられることになる。

私は小林事務官が掌握する財政部門を担当したが、官庁会計は歳入と歳出だけの単式簿記である。私どもが会社で処理する複式簿記でないので、これではチェック機能がなく、処理上、不安でならなかった。現に半年後、辻（京大出身）という専任の官吏が私のあとを引き継いで担当することになったが、しょっちゅう「金がたりない」「金があまった」と騒ぎ、そのたびに応援を頼まれ弱った記憶がある。

小林事務官は東大出のキャリアで独断専行が多く、私どもの仲間は彼に「悪代官」とあだ名をつけていた。「私どもの仲間」とは、私と堀田君、藤沢君のわが社員、アメリカの農科大学出身の佐伯さん、拓大出で宣撫班軍属の小田ちゃんなど、勇ましい連中のグループであった。小林事務官のほうも私どものグループを暴れん坊集団とみていたようだ。

当時、メナド市は戒厳令下にあり、当然、一般邦人の動ける地域範囲は限られ、それより外

に出る場合は軍当局の許可を必要とした。ところがわが小林事務官は、東のメナド橋の境界を越えて女のもとに通っていた。そこには、旧南洋貿易の支店長社宅があり、そこにわが社のインドネシア人支配人ヨハンの娘を囲っていたのである。「悪代官」たるゆえんである。

この勝手な行動に兵隊さんたちが怒り、ある夜、メナド橋警備の歩哨が事務官をぶん殴り、メナド川に放り込んだ。ところがその翌日、驚いたことに小林事務官は顔や頭をぐるぐる白い包帯で巻いて、平然と登庁してきた。おかしいやら気の毒やら、それでも東大出身にしてはなかなかタフだ、と私どもの仲間はいささか悪代官を見直した。

その頃になると、メナドには既に日本酒やビールがなくなっていた。だが何としても飲みたくなって、パラオのわが社経営のデパート支配人に調達を依頼し、見返りとして当地産椰子酒を1ダース贈った。

ところが、その支配人から返書に「このたびは貴重な洋酒を頂戴し、まことにありがとう。残念ながらパラオにはすでに日本酒もビールも皆無で、貴志に沿うことができません。断りついでに申し訳ありませんが、珈琲豆を少しお願いできませんか」とある。仕方がないので珈琲豆2俵を贈ったが、「やぶへび」とは全くこのことであった。

海軍では陸軍の憲兵隊に相当するものを「特別警察隊（特警）」と称した。その取調室、通称ブタ箱は非常に皆から恐れられており、原住民は「カマールﾌﾞｱﾔ（ワ二の部屋）と呼んでいた。取り調べを受けるのは、ほとんど言葉がわからず、その言葉の行き違いから収容され取り調べを受けるインドネシア人であった。そんな原住民の若者の一人を、宣撫班の小田ちゃんを先頭に私どもの仲間が「ワ二の部屋」から解放したことがある。そのうえ、私はその若者が民生部で働けるようにしてあげた。

当時、インドネシア人達は日本人の一挙手一投足を常に注目し噂しあっていたようだ。「あの日本人は良い人だ」「あれは悪い人だ」と。私どもの仲間はこの若者の一件もあり、「よい人」の仲間になっていたようだ。

私がマラリアに罹ったとき、その若者の叔父のドクトル・ウインテルという医者が数十キロはなれたトンダノという町から毎日のように、当時、医者だけに持つことをゆるされていた自動車で診察にきてくれた。本当はインドネシアの医者が日本人を診ることは禁止されており、日本人の診察は海軍病院に限られていたが、あえて彼が診にきてくれたのは、若者について感謝の気持ちを伝えたかったのだろう。

ドクトルやグルー（教師）はインテリであり、専門学校や、中にはオランダの大学の卒業生もいた。これらの人たちとはよく話し合った。あるとき彼らの一人に、「日本人は乱暴者が多いだろう？」と聞いたことがある。彼答えて曰く「日本人は良い人もいれば悪い人もいる。それはオランダ人に良い人と悪い人がいるのと同じで、インドネシア人も同様です。ただあけすけに言えば、日本人は非常に良い人と非常に悪い人と二つに分かれ、同じ日本人なのにまるで別の人種のように思えてなりません」と言ったのに私はショックを受けた。彼らの目にはそのよ

うに映っていたのだろう。しかしこれはある程度、戦争中における特異な現象であると私は思う。
「良い人」といえば、インドネシア人から見て最高に良い日本人は、わが郷土仙台市出身の今村均将軍であろう。
彼は、陸軍第 16 方面軍司令官としてジャワ上陸後 9 日間に早くも蘭印軍を降伏に導いた。占領政策は、皇軍として軍紀を厳しく、現地住民にたいしては労りを最優先させた。また、オランダ軍に拘禁されていた民族独立の志士ハッタ、スカルノの二人を救出し、軍政に協力させた。ときの東条首相兼陸軍大臣は、「この非常時に占領民をノビノビさせておくとは何という不心得か」として、問責の特使を派遣したが、今村将軍は「皇軍とはかくあらねば天皇陛下のご意思に反する」として、断固とこれをはねのけた。
太平洋戦争の中で対蘭印戦略は作戦的にも軍政的にも帝国陸軍の美点のみを顕現した華々しい歴史の数ページを飾るものであり、インドネシア民衆は戦後も長く今村将軍を慕っていたという。
私は現地のインテリ仲間と仲良くなってから「日本人は何を目的としてこの戦争を起こしたのか」と聞かれた場合、何と答えてよいのか一番困った。「君たちインドネシア人はじめ、アジアを白人から解放し独立させるためだ」ということができたならどんなに気が楽になっただろう。また、彼らにも喜ばれたであろう。しかし、この戦争初期の段階では私はまだそう言うことができず、まことに残念であった。

やがて、文野団長ほか数人はバリ島に進出することになりメナドを離れたので、残った者で「南洋興発メナド支店」を開設することになった。稲垣支店長に、私が支店長代理、宇野君がアムラン出張所長、郭君と灰原君は一般社員、（のちに会計担当者としてマーシャルから堀尾さんが着任）、ほかに嘱託として石橋さんは鉱山調査、河野さんは製綿工場の機械技師として残った。
藤沢君と堀田君はそのときスラバヤに行ったが、やがて戻ってきた。藤沢君とは終戦に至るまでメナドで行動を共にした。

まだ堀田君がいる頃、ある調査目的があって彼と二人でトモホン方面にでかけたことがあった。馬車でゆられて行った坂道の途中に果物を並べた小屋があり、無人で、お金を入れる籠がぶら下がっていた。おそらく、果物を買った人が自由に適当な額の小銭を入れるのであろう。価格表示もない、のんびりしたものであった。
用事があり、ある村長に会いに行くと、行くことを先に知らせてあったせいか、白い詰襟の正装で老人が出てきた。なんと日本の村長さんに似ていることだろう。そっくりだ。ただ、足元を見ると裸足であったが。

そのあとおまわりさんの派出所に寄った。ポリスは不在で下男風の男が一人留守番していた。お茶を出してくれた時「お前は誰だ？」と聞くと「囚人です」とのこと。驚いたことに、ここでは囚人が派出所の留守番をしている。泥棒が金庫番をしているようなものだ。「どんな理由で捕まったのか」と聞くと、「郡長さんの悪口を言ったので」との返事。これまたのんびりした話で、どんな悪口を言ったかわからないが、捕まえても派出所の中に自由にさせていた。捕まった方も逃げずにおとなしく留守番をしている。大笑いした。
無人果物小屋といい、この派出所で留守番をしている囚人といい、まったくのんびりして平和だ。こんな平和がいつまでも続けばいいなと思った。

ランゴアン飛行場の落下傘部隊後日談

飛行場警備の目的で落下傘部隊の 1 ケ小隊が残留していたが、毎夜のように火の玉がフワリフワリと歩哨の周りに寄ってくる。さすが勇猛の水兵さんもこれには弱って気味悪がり、小隊長に報告した。小隊長は「臆病者！」と一喝したが、怖がって誰も歩哨に立ちたがらない。とうとう小隊長自ら歩哨に立つことにした。部署について夜になると、はたして暗闇の中から青白い火の玉がフワリと現れた。それも 1 個だけではない。あちらこちらから出てくる。しかし、勇猛で鳴らした小隊長は少しもたじろがず、腰の軍刀に手をかけるやいなや「いい加減に成仏しろ」と、滅多やたらに切り払った。すると不思議なことに次の夜からは二度と火の玉が出ることはなかったという。

この火の玉は死んだ日本兵の魂で、戦友を慕って出てきたのだろう、というのが彼らの解釈であった。

数か月後、この落下傘部隊は他に転進することになり、堀内部隊長自身が私どもの宿舎に挨拶にこられた。眼光鋭くあご髭ぼうぼうの風貌に似合わず、落ち着いた静かな声で丁寧な話しぶりであった。私は彼に、本当のサムライを見た思いがした。

アムラン農園

メナド郊外、と言っても 50 キロくらい離れているが、アムランにわが社所有の椰子農園があった。旧南洋貿易が大正 8 年に開設したものであり、面積 1,200 ヘクタール。周囲を回るのに徒歩で 3 日、馬で 1 日かかるよし。苦力は常時 100 人、家族を入れれば 300 人が住み込みで働いていた。

この農園はプランテーション（植林農園）で、縦横数メートルおきに人工的に椰子を植えたものである。従って林の中に立つと見渡す限り椰子の木が整然と並んで、実に見事なものであった。

上陸後数カ月も経ってストレスもあったせいか、私はすこし体調を崩してこの農園で 1 カ月ばかり静養したことがあった。

その農園での一日の生活

＊　朝 5 時の鐘でクーリー（労務者）は起床

＊　6 時の鐘で事務所前に集合

＊　マンドルブサール（監督頭）からその日の作業の割り当てを受ける（下草刈りや椰子の実採取、運搬など）

＊　予定の作業が済めば各自帰宅して、自家付近に与えられた畑で自由に作物を作ることができる

　トアンブサール（大旦那）の私は、事務所のベランダでコーヒーを飲みながら作業を見守る。そのあとは本を読むか散歩するか、何の仕事もない。

　ある日、マンドルブサールを連れて海岸に行き、カキの殻を開けて持参のレモンをしぼり、米を炊いて食べた。この付近の住民はカキを食べないので岩にいっぱいくっついており、何とももったいないものだと思った。

　またある日、海岸の断崖の上でハモニカを吹き、落ちる夕日を眺め、好きな「流浪の唄」を口ずさんだ。

　　流れ流れて　落ち行く先は

　　北シベリア　南はジャワよ

　そのジャワではないが隣の島のセレベス島にいてはるか日本を望み、親兄弟や同胞のことを思いやって、いささか望郷の念を禁じえなかった。

　その頃、連絡のため農園に来た宇野君の話--- 「農園近くの野原を馬でとおったとき、向こうの方でブーブー鳴き声がする。見ると大きなヘビの上をたくさんの野豚がブーブー鳴きながら踏んづけている。よく見るとそのヘビのお腹が大きくふくらんでいた」おそらくそのヘビが子豚を呑み込み、それに親豚たちが仕返しをしているものと思われた。

　農園に野猿がやってきて、タマネギやイモ類など野菜を食い荒らし、困っていた。空鉄砲で撃つマネをすると尻を叩いて人を馬鹿にし、実弾を込めると逃げる。悔しいが大変利口である。そこである日のこと一計を案じ、ヤシの実をくりぬいた中に猿の好物のタマネギなどをいれておいた。一匹の猿がそのヤシの実に手を突っ込んだのを見計らって追いかけた。ほかの猿は一斉に木の上に逃げたが、その一匹だけはヤシの殻がジャマになって木に登れない。サル知恵とはこのことで、握ったものを離せば手が抜けるものを、あくまでも放そうとしない。

　そのサルを捕まえて顔に真っ黒くコールタールを塗って放すと、仲間のところへとんで行った。真っ黒く臭い変なものが近づいてくるのでサルの仲間は一斉に逃げた。そのサルは追いかけ仲間は逃げる。とうとうそれからサルは農園にこなくなった。

このミナハサにヤシの植林農園（プランテーション）がたくさんあり、わが農園のほか、オランダ人やドイツ人の農園もあった。

ドイツ人が経営していたボイガル農園の話（当時、ドイツ人はいなくて私どもの仲間の佐伯さんが管理していた）・・「自分の住居はたいして立派なものではないが、生産設備にはお金をかけていた。例えば、広いヤシ園の中で成熟したヤシの実を乾燥倉庫に集める方法として、我々は手押し車や牛車を利用していたが、ドイツ人はヤシ園の中に縦横に小川を流し、ヤシの実を小川に投げ込めば自動的に海岸倉庫に集まる仕掛けにしていた。また、そのコプラを天日で乾燥させるため、普通は倉庫の外に並べて雨が降ってくると慌てて倉庫に放り込んだが、そのドイツ人の乾燥倉庫の屋根はレールで簡単に移動できる仕掛けにしており、雨の日も心配ない」。ドイツ人とは如何に合理的な考え方をするものだと全く感心した。

昭和 18 年の元旦の朝、この地で迎える初めての正月である。しかし、こう暑くては気分がのらない。暑いといっても平均 27，8 度程度であったが、餅もおせちもなく、おめでとうと言われても、「アアそうですね」ではしまらない。日本の正月が懐かしい。

夢物語二題

（その一）私が仲間と雑談中、たまたまこの戦争の行く末の話になった。我が国が勝つためにはトルコを仲間にする必要がある。日独伊の同盟にトルコが加われば断然わが方が有利になる、という話になった。ついては我々がトルコに潜入し、その宣撫工作をしようということになった。わが社の社員で我々と一緒にメナドに来ている山内君は、かの山内一豊、山内容堂の子孫で、当時の永野軍令部総長は山内家の家老の家柄であることはわかっていた。山内君から軍令部総長に頼ませて潜水艦 1 隻を借りさせよう。我々はそれに乗ってエーゲ海の奥深く、トルコ側の海岸に降ろしてもらう。

ところで宣撫工作をするには言葉ができなければならないが、トルコ語なんてさっぱり見当がつかない。しかしアラブ語が話せれば何とかなるだろう、という論法で、まず、私がアラブ語を勉強することになった。

メナド市内にはアラブの商人が何人かいて、その一人を先生とした。その先生の家に招待されたことがある。玄関を入ると大きな広間で絨毯が敷きつめられている。その上にアラブの男たちと車座になってお茶のごちそうになった。

女性が出てこない。ハハアと思って「奥を見せてくれ」と頼んだ。奥のほうに何部屋かあり、そこに女性たちがいた。小型だが完全なハレムである。

この先生についてアラブ語の勉強をはじめたが、どうしても発音できない言葉がある。1 カ月でとうとうあきらめ、トルコ行きの話はオジャンになった。

（その二）当時わが軍はラバールからガダルカナルまで進んでいた。この次はこれも何故かフ

ィジー（英領）だということになった。フィジーは南太平洋の海空交通の要衝であり、「南洋の十字路」と言われていた。

ちょうどその頃、わが南洋興発所有の「ぬし丸」がメナドに寄港し、龍王船長があいさつに来た。龍王船長はその名のとおり大柄で豪快な性格の持ち主だ。その船長を交えて皆で話し合いをした。我々は日本軍に先行しよう。目標はフィジーだ。大高兵曹（しょっちゅう遊びに来る九州男子）に機関銃小銃装備の２コ分隊引き抜かせよう。

ぬし丸でフィジーの海岸まで行き、パラパラと掃射すればまず大丈夫、上陸、占領できるであろう。占領後はフィジー共和国を建国する。女王はフィジー諸島一番の美人を選出する。総理大臣堀田、大蔵大臣小坂、産業大臣藤沢、警備隊指揮官は大高兵曹を任命するー　と国造りの構想が立ち、船長を含めて皆大喜びして乾杯した。

ところが翌日、あの龍王船長が大きな体を小さくしてしょぼしょぼと謝りにきた。「どう考えてもあの話は無茶だ。なかったことにして勘弁してくれ」。いくら説得しても言うことを聞かない。船がなければイクサにならない。この話もお流れになった。

こんな馬鹿げた夢物語を思いつくのは大体私で、すぐ「そうだそうだ、やろうやろうと仲間たちは賛成した。それでもそのときは結構皆大真面目であった。

実はこの話にはきっかけがある。それは戦前、堀田君など南洋興発の若者たちが実際に島を占領した経験があったことである。その島とは、当時の仏印（今のベトナム）とボルネオ（カリマンタン島）、フィリピンに囲まれた海域にある南沙諸島である。

南沙諸島占領秘話

南洋興発は燐鉱（肥料の原料）をも扱っており、当時は遠く太平洋上のナウル・オーシャン諸島から輸入していたが、当社の調査で南沙諸島にも燐鉱があることがわかり、これを開発したいと考えた。会社の方針と海軍の意図が一致し、この島が日本領土であるという明確な証を残そうと企画した。しかし、いきなり海軍ではちょっとマズイ、まず、わが社の社員が行動を起こそうということになった。

そこで堀田君の仲間総勢１０人ばかり、海軍から機関銃、小銃の貸与を受け、東京から出発した。銃器はこもかぶりにして網棚に放り上げ、東海道線を西下した。

内地では事なきを得たが、台湾に上陸してすぐ憲兵隊に武器が見つかり、皆はたちまち牢屋に放り込まれた。海軍からの依頼であることをいくら釈明しても一向に信じてもらえなかったが、本社から海軍を動かし、何日かかかってやっと牢屋から出された。

そして、かねて手配していた２００トンくらいの船に乗り、高雄港から勇躍出発した。しかし、ここは名にし負う南シナ海、出港後いく日もたたないうちに暴風雨に見舞われた。豪雨と波浪に翻弄され、船員たちの必死の操船でやっとフィリピンの名も知れない湾に逃げ込むことができた。

その湾内の海岸沿いに寒村があった。夕方になって風雨が少し収まってきたので船員数名が上陸した。土民が集まってきたので船員たちは自分の持ち物と物々交換で野菜、果物などを手に入れた。もちろんこの上陸は国際法違反である。宵闇がせまると、あちこちからタイマツの灯が見え始め、次第にその数を増し、やがてこちらに向かってきた。兵隊か、警察か、おそらくその種の者達であろう。面倒が起きる前に急いで船員たちを乗船させ、再び荒れ始めた暗い海面を必死で南下した。

相当に走ったと思ったが、一夜あけてあたりを眺めてがっかりした。なんと目の前に昨日の寒村が見えた。わが船は暴風雨の中、ただ湾内をぐるぐる回っていたに過ぎなかったのである。

この海域にはさまざまな孤島や無人島がある。その一つの島に上陸してみた。中国人らしい男が数人住んでいた。目が鋭く体の大きな男たちである。普段は漁業に従事しているようであったが、我々が訪れたときは皆が長持ち様の大きな木箱を作っていた。この箱が面白い。この箱のある個所を押すと蓋が開いて次の箱が出る。その箱のある個所を押すとまた蓋が開き、次の箱がでる。このように次々に秘密の個所を押して最後に真ん中の小さい箱に達するが、その押す個所を各人それぞれが工夫し、他人にはわからない。要するに魔法の箱であるが、何の目的でそのような箱を作っているのかわからなかった。暇つぶしであろうか。

ところが、ひょいと天井を見て驚いた。なげしに数本の槍が横たわっている。これで分かった。目の鋭い彼らは機会があれば海賊に早変わりするに違いなかった。

さらに南下を続け、めざす南沙群島の主島に着岸した。直ちに上陸しようとすると、１０人ばかりの土民兵が立ちふさがった。フランス軍に雇われた安南兵らしい。安南人なら漢字を理解する者がいると思い、機関銃を差し向けながら文字を書いて手渡した。

「大日本帝国の領土であるこの島に汝等は誰の許しを得て駐在しているのか？」と問い詰めると、彼らは「日本領土であるとは知らなかった。自分たちはフランス人のボスに使われている身だから」と釈明した。「知らなかったなら仕方がない」と言って、そのフランス人のボスのところへ案内させた。

こざっぱりした邸にその理事官は住んでいた。退役したキャプテンで、恩給暮らしかたがたこの島の理事官をやっているようだ。ふざけたことに相当のジジイなのにかわいいパリジャンヌを女房にしている。

まさか「ここは日本領土だから立ち退け」というわけにはいかないが「昔からこの島には日本人が住んでいた形跡があり、領土権について貴国と交渉中である。従って、決着するまで一応軟禁する」と申し入れ、その屋敷の周囲に鉄条網を張り巡らした。

無線電信か何かの方法で軍の基地に知らせたのだろう。翌日、フランス国旗を掲げた小艦が現れた。肝を冷やしたが、日仏の紛争を恐れたのかその艦は島を３回まわって帰ってしまった。

あまり気分が良いことでもないので他の者は理事官邸に行かなかったが、堀田君など２，３人はその女房のところへ遊びに行った。お互いにうろ覚えの英語でフランス映画などの話など

すると、いつも年寄りの相手をしていたパリジャンヌは大いに喜び、ウイスキーやブランデーなどでジャンジャンもてなすので、亭主はしぶい顔で横目でにらんでいた。

適当な枯れ木を拾って島のあちこちに「江戸の人・浜田弥兵衛の墓」などと墨で書き、何本かの墓標を立てた。後日、日仏交渉に役立てるためである。燐鉱の調査もしたが、これは大した量ではないようでがっかりした。

これで任務が終わったので帰途についた。途中、無人の難破船が岩礁に乗り上げており、船内を調べると英国製の上質の洋服地がびっしり詰まっていた。痛んでいないものを押収して皆に分配した。その際「上陸してもすぐに売らないように」と注意したにも関わらず、船員たちは高雄上陸直後に売り払い、酒代にした。この洋服地の出所について警察沙汰になったのには弱った。

これで堀田君たちの悲喜こもごもの旅は一応任務を全うして終った。数か月後、日本政府は「南沙諸島は日本領土である」と宣言した。

ずいぶん強引なやり方だと思うが、本来フランスだって領土権を主張する根拠はない。あの辺りは中国人やフィリピン人、インドネシア人などが住んでいただろうし、日本人の漂流者もいたかもしれない。最近、韓国は日本海上の竹島は自国領土であると主張して強引に灯台を建てた。このような例はいくらでもあり枚挙にいとまない。

第 3 部　漂流（昭和 18 年 1 月より 19 年 5 月まで）

漂流

ある日、民生部の山岸農林事務官から「今、メナドで米が不足している。中部セレベスのポソに行って米を調達してくれないか」との話があった。ちょうどその頃、私は民生部の嘱託の仕事を離れ、正式に南洋興発メナド支店を開設したときなので、支店長代理としての私は留守中のことがちょっと心配になった。が、「往復せいぜい 1 カ月くらいだろう。だから、その間支店の面倒は私が見る」と事務官が言うので、私はポソにむけ出発することにした。

私のポソ行きを聞いてドクトル・ウインテルは「自分の親戚の医者がポソに住んでいる。是非会ってほしい」と言って、ドクトル・エンドーという人への紹介状をくれた。

1 月上旬、私はメナド市東方にあるビトン港を出航した。50 トンくらいのポンポン船 2 隻であった。船長室にベッドがふたつあり、眼の鋭い、何やら怪しげなインドネシア人の男がもう一つのベッドを使用した。船長はなぜかこの人物に遠慮がちで、甲板に寝ていたようだ。「Tabek tuan (こんにちは)」その男は私に挨拶して、すぐ向こうむきになって眠った。

実は、今回の戦いで残存オランダ軍はポソ地方に逃げ込み、そこで日本軍に最終的に捕捉・殲滅された。その戦いに巻き込まれて中国人や現地住民も何人か殺されたとのことで、「治安

が多少心配だからピストルを持参してはどうか」と、山岸事務官から話があったが、ピストル一丁で何ができるかと思って、丸腰で出発したのである。

途中で船はトミニ湾沿いの「ゴロンタロ」に寄港した。この町の名はインドネシア語としてもちょっと変わっていて、日本名の五郎・太郎が訛ったものではないかと言われていた。ここに日本人が一人住み着いていて、元気に活躍していた。この人から接待を受け、船のエンジンの点検も済ませて翌日、一路ポソに向かってトミニ湾を横切った。

例の、眼の鋭い、何やら怪しげなインドネシア男はいつの間にかいなくなっていた。

ポソにはランスカップ（王政府）が置かれ、ラジャ（Raja）が治めていた。オランダは各地のラジャを昔のまま残し、これを通じてインドネシア各地を統治していた。間接統治である。

ポソの王様に米のことを話したが彼はインドネシア語を全くわからず、土語しか話さなかった。もちろん、ランスカップにはインドネシア語がわかる役人はいたが、正式にコメを要求する話の対象者として Raja mueda（若王様） に話してくれとのことで、若王様に会うためにやむなく翌日ポソ南方の高地のテンナテ湖（ポソ湖）に行くことにした。

その夜、ドクトル・ウインテル紹介のドクテル・エンドー宅を訪ねた。夫婦とも医者で高等教育を受けた人、揃ってテニスが得意とのことで、部屋に多くの優勝カップを飾り、庭にはテニスコートまであった。

奥さんが用意した洋食は完全なフルコースで、オードブルから野菜、魚、肉、デザート、食後のコーヒーに至るまで、こんなにおいしい料理は何年ぶりかと感激した。

翌日、テンナテ湖のパッサングラハン（簡易ホテル。オランダ時代、各地にこの簡易ホテルを設けていた）で若王様を待つことにした。

そのホテルにトラジャ人が二人訪ねてきた。このポソ地方は、ブギス人が勢力を張っており、南から来たトラジャ人は遠慮勝ちのようであった。二人が言うには、「このポソ湖のあたりにはワニが少なくなっているが、下のポソまで行くと沢山いる。ポソまで行ってワニを捕りたいが、我々が行けばブギス人は捕えると言っているので、行けなくて困っている」と言う。日本人はオランダ人に代って権力者になったのだから、頼めば何とかなると思ったようだ。

「同じインドネシア人同士で何を言うのだ。かまわないから行きなさい。もし、捕らえられて牢屋に入れられたら私が出してやるから心配するな」と励ましてやったら、大変喜んでポソへ行ったようだ。

（中略）

翌朝、例のワニ捕りの二人がパッサングラハに訪ねてきた。喜色満面で「おかげで昨夜は大きなワニを二匹捕ることができた」と、お礼に「ワニチン」をくれた。「ワニチン」とは、ワニの逸物を乾燥させたもので、飴色をしていて精力剤として大変に貴重なものだということを後日聞いた。後日、私が試しに大根のおろし金ですりおろしてお酒に入れて飲んでみたらニキビ

が出た。びっくりして稲田支店長にやったら非常に喜んだ。

私はワニ狩りに行きたくなって彼らに頼み、その晩行く約束をした。

部落のはずれに出てみると見渡すかぎり稲の波、日本の秋を思い出した。あちこちに穀倉が建っていて、ネズミ返しのために高床になっている。屋根の端に千木がついていて、日本の神社の建物のようだ。

この地方に残っている伝説

昔、この地方で男群と女群とが大喧嘩したことがあり、男は男だけ、女は女だけ集まって生活することになった。

女の国では、女王は金の剣を佩き、その家来は銀のサーベルを提げて馬で駆けめぐり、なかなか颯爽たるものであった。

しかし 3 年経ち、男たちも女たちもそろそろ我慢ができなくなり、とうとう和解することになった。仲直りした途端、男は女の乳房を噛み、女は相手の逸物を噛んだという。以来、この地方では石で歯をすり減らす習慣ができた。今でも近くの田舎にいくとまだその習慣が残っているところがある、とは土地の古老から聞いた話である。

そういえば日本でも明治のころまで、女が結婚すると「お歯黒」という習慣があった。あれも「私には歯がありません」とのしるしかもしれないし、あるいは南の方から伝わった風習かも知れない。

日本の昔話に「因幡の白兎」の伝説があるが、それとそっくりの物語がインドネシアにもある。

子鹿が宵闇せまって自分の家に帰りたいが、川が深くて渡れない。川にはワニがうようよいるので、小鹿は一計を案じてワニに語りかけた。「ワニくん、ワニくん、私は動物の王様からこの川にいるワニの数を数えるようにと命令を受けた。ついては、こちらの岸から向こう岸まで、川上に頭を向けて並んでくれないか」と言ってワニを並べさせた。そして小鹿は「一つ、二つ、」と数えながらワニの背中を跳んでわたった。向こう岸までわたると「さよならワニくん、俺はただ川を渡りたいためにお前たちの背中を借りただけだ」。ワニたちは怒り、小鹿に跳びかかろうとしたが、その前に小鹿は逃げ去ってしまった。

日本の伝説は子鹿の代わりに白ウサギであり、これに大国主命の慈悲心を結び付けた点だけが違う。日本にワニは生息しないからこの物語のワニは「ワニザメ」だと説をなす者もいるが、ワニザメは常に動いていないと死んでしまうので、この説は間違い。やはり原点は「ワニ」であろう、この出雲の伝説のルーツは南方にあると言わざるを得ない。

またインドネシアのバリ島には、日本の羽衣伝説そっくりそのままの話があるという。日本とインドネシアとは相似点がとても多い。

その夜、ワニ狩りのため密林に入った。浅い川をカヌーは滑るように進む。浅いので時にはカヌーから降りて押したりしながらジャングルの奥深くへ入り込んだ。真っ暗な闇の中、突如、怪鳥が奇声をあげ飛び去ってゆく。一人が舟のへさきに立ち、左手にランプ、右手に槍を持っている。もう一人は後ろ座席で漕ぐ。トアンの私はカヌーの真ん中に座った。

彼らのワニ狩りの方法はこうである。まず、ワニを見つけたらランプで照らし、呪文を唱える。その呪文でワニは動けなくなるので、その隙に槍を眉間に打ちこめば楽に捕ることができるそうである。

しかし私は、ランプで照らされるとワニはその光に目がくらんで動けなくなるのだと解釈した。残念ながら彼らの言うとおりほとんどワニがいなくなっており、その夜は捕ることができなかった。

翌朝、いよいよ若王様に会えることになった。パッサングラハンの窓から見ていると、若王様一行が地方巡視を終えて村はずれの橋から入ってきた。腰に剣を提げ、ソンコ（回教帽）をかぶり、馬にまたがっていた。10 人ばかりのお付きがやはり馬に乗って後に続いていた。その橋のたもとに村の青年男女が 20 人ばかり出迎え、竹の笛と太鼓を鳴らしながら先頭に立った。若王様の行列はそのうしろを悠々と村へ入ってきた。

1 時間ほどして若王様は村長に案内されて現れた。まだ 30 歳前のなかなかの好男子である。

早速、用件にはいった。

「メナド地方では今、米などの食料が不足して困っている。日本人及び日本軍の食料は日本から持ってきて間に合うが、住民にまわすほどの余裕がない。君たちと同じインドネシア人がメナドで飢えているのだ。ポンポン汽船 2 隻に乗せられるだけの量の米を分けていただきたい。もちろん購入代金は支払う」

大体以上の趣旨の話をした。若王様はもちろんインドネシア語がわかり、私の申し出を了承した。

ただ、たとえ若王様の了承を得たとしても、そう急に米を集荷することはできないだろう、と私は判断した。そこでこの地方で経済的に力をもっている華僑を呼び、時価より 1，2 割高い値段で購入を依頼した。効果てき面、2 日で船 1 隻分の米が集まったので直ぐにメナドに向け出港させ、2 日後の船で私もポソをあとにした。この、後の船に乗ったためにわたしは漂流する羽目となったが、仕事の責任上やむを得ないことであった。

ポソを出発した後、少し北方にあるパリギというところから、「来てくれ」との連絡があったので寄港した。そこに、土地の役人が訪ねてきた。

「トアン、申し訳ないが調べてもらいたいことがある。一人の男が、「自分は日本軍の宣撫班だ」と言って、日本語で書いたような腕章を見せびらかして威張っている。物を強奪などして

怪しいので一応捕まえたが、本人が言う通り彼が本当に日本軍の宣撫班の者だと面倒がおこるので、本人に会って調べてほしい」という申し出であった。
　そこで、本人を連れてこさせた。上目を使って、ずるがしこそうなインドネシアの中年男だが、その腕章を見て思わず大笑いした。なんとその腕章は、香港製小麦粉の袋の切れ端であった。漢字で印刷されていたため、一般のインドネシア人では判断がつかなかったのである。
「このインチキ小麦粉男をぶっ叩いて牢屋に放り込め」と言ったら、役人たちは大喜びでその男を連れ去った。

　パリギを離れて少し航行したところで、船が動かなくなった。エンジンの故障である。待っても待ってもなかなか直らない。数日が経過した。もちろん、米は腐るほどあるが、水が少なくなった。ポソ出港のとき船長に「野菜を買うように」と 10 円渡したが（10 円は下男下女の 1 カ月の給料と同額）、まさかこういうことになるとは思っていなかったのだろう、船長は何も買っていなかった。
一週間たった。ずっと彼方に「ウナウナ」という島がかすんで見えるだけで、ほかに陸地は見えない。船はただ、漂うばかりであった。
このまま流れにまかせていてもラチがあかないと思い、私は船長に「いかだを組み、帆を用意せよ」と言った。「トアン、どうするのか？」「おれ一人で筏に乗ってあのウナウナ島へ行き、助けを求める」。この時の船長の言葉が良い。「トアン！　トアンと我々は死ぬときは一緒だ。トアンを一人で行かせるわけにはいかない」まるで浪花節で、その心意気は日本人によく似ている。「ヨーシ、それでは全力をあげてエンジンの修理に取り組め。もし、今夜の 12 時までに直らなかったら俺一人で行く」。
それから必死の修理が始まった。するとアーラ不思議！　ちょうど夜中の 12 時に「コトン」とエンジンが動き出した。コトン、コトン、ゆっくり船が動き出した。少しずつ少しずつ船は進み、数時間かけてウナウナ島のパシルプティー（白い砂）という浜に到着した。「白い砂」と名称はきれいであるが、大小の岩がごつごつある荒磯で、そこに到着した途端にエンジンはゴトンと悲鳴をあげ、壊れてしまった。船員たちの執念でやっとここまで来られた感じであった。
ウナウナ島にもラジャがいて、私はその王様から食事の招待を受けた。困ったことにはハエが沢山いて白いご飯にたかる。王様は平気な顔で食べていたが、私は全く閉口した。片手でハエを追い払い、その隙に食べるのだが、２，３匹はご飯と一緒に食べたかも知れない。
エンジンの応急修理をしてウナウナ島を離れたが、すぐ大嵐に突入した。赤道直下の南洋でこんなに荒れるのは全くめずらしい。にっちもさっちもいかず、また島に舞い戻った。次にやっと出発したのは 2，3 日後であった。
ゴロンタロに寄って数日かけてエンジンを完全修理し、このように散々な目に遭いながら、や

っと出発港のビトンに向かった。
私が 2 か月以上も行方不明となったので、留守番の稲垣支店長が心配して何回も救助船の出動を頼んだが、民生部はなかなか腰をあげなかった由。やっと民生部が出した救助船に途中で出会ったが、私たちはその船の力を借りず自力で運行し、やっとの思いでビトン港にたどりついた。
この 2 か月半の旅で、私の体重は 5 キロも減った。見事なダイエットである。
なお、山岸事務官は私の出発前「南洋貿易支店の面倒は私が見る」と約束したが、まったく面倒を見なかった由。役人とはこんな類が多い。

再びメナドにて
　私どもの宿舎のある一室に私と河野さんが寝泊まりしていたが、ある夜中、「こさかさん、こさかさん」と小声で河野さんが私を起こした。
「この夜中に何ですか」と、眠い目をこすりながら尋ねると、河野さんは何も言わず、戸口のほうを指さした。見ると戸口の真っ黒な闇の中、白い手が「おいで、おいで」をしているのには驚いた。飛び起きて灯りをつけてみると若い女が白いパジャマ姿で立っている。
　それでわかった。この女はたしか数日前、郭君が呼び込んだ女だ。もちろんそんなことはあからさまにはいけないことだが、ママあることだ。ちょうどその夜、郭君は勤務先のホテルで泊まり込み不在であったので、その女には帰ってもらった。
　ところが次の夜、私が便所に行こうとして渡り廊下を渡ろうとしたとき、廊下の真ん中に白いものがボーッと立っている。気味悪かったが近づいてよく見ると、昨夜の女だ。もう二度とこないよう、厳しく叱って帰した。
　その後、その女はあちこちの日本人のところへ行くようになった。そして、私の宿舎で日本人の眼鏡をかけたトアンに指輪をとられた、と言いふらしているらしい。私の宿舎で眼鏡をかけたのは私しかいない。とんでもない女だと思ったが、その後よく聞くと、あの女は気が狂っているとのこと。郡長の娘だが、日本軍が上陸したときにレイプされて気が狂ったとの話を聞いた。もしそれが本当なら気の毒であり、私もやむを得ないことだと納得した。しかし、この女については後日談がある。
　その後、この女はたびたび三菱商事の支店長宅へ遊びに行くようになった。支店長が仲間とマージャンで遊んでいたときその女が来たので、皆が「オイ、肩をもめ」とか「逆立ちしろ」とか、気狂いだと思ってからかったりした。ところがある日、支店長は急用があって日中にちょっと帰宅したことがあった。そのときに女がいて、机の引き出しを勝手に開けて書類を調べていたという。
「あの女は気違いではない。スパイだ」との疑いで皆が警戒するようになり、その女はその後ふっつり来なくなった。

敵機が飛来するようになったとき、あちこちの山間から「のろし」が上がるようになった。オランダが統治してから 300 年、もちろんこれはスパイの仕業だったろう。

その後、私ども旧副理事官官邸の住人は次第に少なくなって、私は一番広い部屋（30 畳くらいあった）に移った。この部屋が問題で、夜中にベッドの横の窓の外側の細道で足音がする。ときには女のささやくような小声が聞こえる。この細道は閉ざされていて、人は通れないはずである。窓を開けて見ても誰もいない。

こんなことが幾夜か続いたあとのある夜中、邸の前庭の砂利を「ガツガツ」と踏む軍靴の音が聞こえた。その足跡は一歩一歩近づいて、ついにはベランダに上がり、私の部屋の扉の鍵をガチャガチャさせた。私は兵隊が酔っ払ってきたのかと思い「誰か？」と叫んだが返事はない。ベッドからとび起きて扉を開けたが人っ子一人もいない。全く不思議な話だ。

母屋から渡り廊下を渡ったところは横に細長い建物になっており、渡り廊下の突き当りが便所、その左側は浴室と台所が並び、便所の右側は二階になっていて、一階が下男頭の部屋、二階は納戸になっていた。下男頭は夜中、扉を開けて灯をつけ放したまま寝る。そのわけを聞くと「夜中に二階でジワ（死者の霊）が出て騒ぐ。恐ろしいのでその時は部屋から飛び出す」との話。数年前にその二階で前の下男頭が病死したことは事実であったようだ。

そのうちに私も一人で住みたくなって他の一軒家に移った。それまで私が使っていた部屋は一番広くて立派なので、さっそく灰原君が「使ってもよいか？」と申し出てきた。変なことが度々あったことを話せば気にすると思って何も話さなかったが、翌朝灰原君が「あの部屋は変でないですか？」ときいてきた。私がいたときのことを話すと、びっくりしてたちまち元の部屋にもどった。

この話には更に後日談がある。民生部の役人が次第に増えて宿舎が手狭になったらしい。我々の旧理事官邸は大きいので、ある日、小林事務官から「宿舎を交換してくれないか？」との申し出があった。私は承諾したが、今度は「ただし、あの邸の一室では変なことがありますよ」と話しておいた。

移った晩、私がいた部屋は広いので数人がベッドを並べて寝たが、夜中に「出たっ」と叫んで全員が部屋を飛び出したそうである。何が出たのか聞かなったが、以後、その部屋は誰も使わなくなった。

ある日のこと、灰原君が自動車を運転中、兵隊さんを轢いて怪我させたことがあった。稲垣支店長は不在だったので、私が灰原君を連れてお詫びに行った。直属上官の渡辺小隊長が顔を真っ赤にして興奮しており、「お前が責任者か？　貴様の部下は陛下の股肱を殺す気かっ」と大声で叫び、腕を震わして今にも腰の日本刀を抜かんばかりである。私はただ平謝りに詫びを入れた。

それから毎日のように灰原君に花やケーキを持たせて見舞いに行かせた。それで気が静まったのか、やがてその兵隊さんは回復し、挨拶のため支店にたずねてきた。
その兵隊さんは病院船で内地に送還されることになったが、その病院船は内地を目の前にしてから敵機に襲われて沈没したとのことで、まったくついていない話である。

アムラン農園からお米を 1 俵とどけて来た。宇野君が「これは日本種の陸稲だが、おいしいから食べてくれ」というので、食べてみて驚いた。そのおいしいこと。日本のお米はこんなにうまいのか。これならオカズがなくても塩だけでも食べられる、と本当にそう思ったくらいおいしかった。

このお米は今回はじめて収穫できたものであり、ここに至るまで次のような苦労話がある。

オランダの巧妙な搾取政策の例　―――　オランダは原住民が必要とするお米を約 8 割に生産制限し、残り 2 割をシャム（タイ）からオランダ自身の手で輸入していた。その米を運搬するには「オランダ王室汽船」だけを使用する。その運賃は独占価格でベラボーに高い。　この汽船会社がシャムからインドネシアまで運ぶ運賃は、たとえば日本の船で一度シャムから日本へ運び、折り返して日本からインドネシアまで運ぶ運賃よりも高い-----　とのことで、これは驚くべき事実である。もちろん、おいしい日本種の籾は輸入を禁じ、作らせなかった。

そこでわが社で台湾系高砂陸稲種の籾をひそかに手紙の封筒の中に数粒入れて送った。その籾を毎年増やし、やっと今回、まとまった量の収穫ができたとのことであった。この間の苦労がしのばれる。

オランダの植民地政策が英仏などに比べて特に過酷であったというわけではない。しかし、非常に高価な香料の最大生産地である香料群島を独占し、あるいはコメの生産制限を行って現地住民の首根っこを押さえ、さらに不足分のコメの運賃で稼ぐなど、非常にやり方が巧妙悪質であった。

わが社の子会社である南太平洋貿易の青柳君がハルマヘラへ行ったとき、土産に「ルリ」という小鳥を買ってきてもらった。ルリ（インコ類）は身長 10 センチないし 15 センチ、しっぽが長く、オームより小型でスマートである。全身真っ赤なドレスで、胸に緑色の月の輪がある。ふかし芋、ご飯、バナナ、なんでも食べる。

私のルリは大変な利口者で、私が主人であることをすぐ覚えて、私が外出から帰ってきたのがすぐわかる。まだ遠くにいても「コサカ、コサカ」と叫んで、使用人に私が帰ったことを知らせる。知らない人がくると「パンチュリ（泥棒）」と連呼し騒ぐ。いつも放し飼いなので私が食事をしているときはテーブルの上までコトコトとクチバシで上がってくる。そして主人（私）の皿から食べ、決して自分の皿からは食べない。ルリは自分自身が主人と思っているかも知れない。

あるとき、灰原君がルリをいじめようとしたことがあった。それからは彼が来るたびに覚えていて飛びかかろうとする。灰原君が逃げてもどこまでも追いかけるのには驚いた。

ある日、支店長宅で椅子に腰かけてマージャンを楽しんでいた。そこに支店長が飼っていた老犬が入ってきて、まず、稲垣支店長の股の間を、身体を擦り付けるようにして通り抜け、次に私の股の間を同じようにして通り抜けた。こうして 4 人の股の間を、身体を擦り付けるようにして通り抜けて、ヨタヨタと扉の外に出て行った。
「変なことをするなあ」と訝りながらマージャンを続けたが、どうも気になるので戸外に出て見たら、そこで老犬は息絶えていた。あれは、老犬が最後の別れをしに来たとしか考えようがなかった。
動物に心や感情があり、記憶する能力もあることはわかるが、礼儀ただしく別れの挨拶をするとは驚いた。

下男頭のガイシは大変忠実で主人思い。主人の言いつけには極端にいえば水火も辞さないところがあった。
あるときそのガイシに「俺も若いんだからお嫁さんが欲しいな」と、冗談で言ったことがあったらしい。私は忘れていたが彼は本気にしたのだろう。ある日、本当にその花嫁さんが山の村からやってきた。きれいに着飾って、花を片手に馬車から降りてきた。15, 6 歳の丸顔の可愛い子ちゃんである。付き添いの中年女性も一緒だ。
とんでもない話なので帰ってもらおうとすると、その付き添い女が「ガイシから特に頼まれたのでアチコチ探してやっと見つけたお嫁さんです。今更そんなことを言われても困ります」と言うし、花嫁さんに至っては「私がトアン・コサカのお嫁さんになるというので村でフェスタ（お祝いのパーティー）を開いてくれて、その人たちに見送られてきたので今更帰るわけにはいきません」と泣く。
これはまたとんでもないことになったとほとほと困り、ただ平謝りに謝って「日本人は現地住民と一緒になることは禁止されている」と断った。（これはたてまえで、実際には一緒になっている人もいた）。日本の妹たちに贈ろうと思って買っておいたワニ革のハンドバッグや靴、装飾品などみんな持たせて、三拝九拝、やっと帰ってもらった。
（中略）

私はある日突然高熱をだした。おそらく 40 度以上の熱であろう。七転八倒、ベッドから転がり落ちるほどであった。それまで病気でも何でもなかったのにどうして急に高熱が出るのか腑におちなかった。
ちょうどそこに金城君の奥さん（チャモロ人とドイツ人の混血）が来た。金城君は私

の隣人、沖縄出身で私が面倒をみていた。この奥さんは魔女で病気を良く治すのだが、このとき私を見てこれは自分の手に負えないと思ったのか、自分の先輩を連れてきた。先輩はインドネシアの老女であった

婆さん魔女はさっそく聖水をつくり、ハンカチをその聖水に浸し、それを私の脚部にそっとかざした。そうするとスーッと湯気が立ち上って、まるでハンカチに吸い込まれるような気がした。それと同時に熱もスーッと引き、たちまち平熱となった。

不思議に思って病気の原因を訊くと、「これです」と言ってそのハンカチを広げた。ハンカチから髪の毛やら爪やら何か汚いものが出てきて、これを足の中から取ったので治ったのだ、と言われた。

そういわれてもにわかに信じるわけにはいかない。しかし、今まで七転八倒していたのがスーッと湯気が立つとすっかり治り、ダンスでもしたいような陽気な気持ちになったのは事実で、何とも不思議な話である。

これでこの土地の魔術に興味が出てきたので「なぜ、あのような不思議な病気になったか」調べようと思って、今度は男性魔術師に来てもらった（そういえば魔男という言葉がないのは何故だろうか？）

その中年男は 10 歳くらいの娘さんを伴ってきた。この娘は魔術師の相棒である。必ず処女でなければならないらしい。

部屋を暗くして、ヤシ油ランプの煙でその娘の親指の爪を煤けさせてから男は尋ねた。

「その爪の中に何が見える？」　娘が「家が見えます」

「その家はどちらの方向か？」　「ここから西南の方向です」

「どんな家か？」　｛平屋で、左にヤシ、右奥にバナナの樹がみえます｝（これは堀田君たちが住んでいる家にそっくりだ）

「次に何が見える？」　「日本人のトアンが三人出てきました」

「どんなトアンか？」　「先頭は小肥りの人です」　（堀田君だ）

「次に出てきたのは？」　「このトアンです」と、私を指す。

「最後の人は？」　「背が高く眼鏡をかけている」　（青柳君だ）

「それからどうした？」　「家の前に回教帽をかぶった若い男が座っている。その男はあらかじめ道路に汚いものを埋めていた。それを真ん中の人（私）が踏んづけたのを見て、男は大きく口をあけて笑った」

「それが原因です。ついでにこれからその男を探しましょうか？」と男は申し出たが、今更面倒なので止めにした。

しかしこれを機会に、その後、土地の迷信や魔術についていろいろ調べてみた。馬車で出かけてガタンと傾きかけると縁起が悪いので家に引き返す（日本でも下駄の鼻緒が切れたら引き返す迷信あり）、葉っぱを貨幣に変える方法、クリス（短剣）や矢に塗る毒薬の製法、恋敵を

呪い殺す方法など、どこでも同じようだ。

その頃、内地から来た退役軍人らしい中老の人を二人、我が家にしばらく宿泊させたことがある。警備隊から依頼されたので軍関係者であることはわかるが、昼間でかけて夜遅く帰宅する。その間何をしているのか、怪しげである。

食事のとき、何かのついでに私が「東条首相は切れ者との評判ですね」と言うと、「東条はナイフだ。ナイフでは紙は切れても大木は切れんョ」と、当時の首相を呼び捨てにした。眼光するどくガッシリした体躯の二人であり、おそらく大本営付き謀略担当の将官だろうと見当をつけたが、本当のところはわからない。

（中略）

配給組合

「そろそろ内地からの物資の入荷が難しくなるであろう」、との予想の下で、民生部からの勧めもあり「メナド配給組合」を結成することになった。目的はメナド市を中心としたミナハサ地域の物資の自給自足である。商社である三菱、三井、丸紅、兼松、江商それに南洋興発、および地元企業の山田商店（本社はセレベス島南部のマカッサル市）を構成メンバーとした。三菱商事支店長が配給組合長、私が総務部長となり、他の５社もそれぞれ支店長を役員として出した。使用人は中国人（書記）、インドネシア人(労務者)半々である。土地の言葉ができる私と山田商店の人、インドネシア人以外の役員はあまり役に立たなかった。

取り扱い品目は、内地からの在庫物資の織物、鍋、皿、茶碗類、雑貨。現地調達の米、たばこ、椰子酒などのほか、日本人に必要な落とし紙（バナナの葉っぱ）や歯磨き粉（赤レンガを砕き、塩、香料を混ぜたもの）まで組合でつくって販売した。

特筆すべきは、わが南洋興発支店で作った味噌・醤油である。工場はメナド橋際に建設し、藤沢君が工場責任者となった。製品は大好評で「海軍広報」で広く紹介された。また、後日上陸してきた陸軍部隊の本職の味噌屋が勉強のため泊まり込んだほどであった。味噌は次第に現地住民も食べるようになり、藤沢君は彼らから「トアン・ミソ（味噌の旦那）」と尊称？されるまでになった。

組合ではまた、ミシンを集めて縫製工場を設置した。あるとき、日本の船が近海で沈められて、隊長さんを筏に乗せ、赤フンドシ一丁の兵隊さんたちが「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で上陸してきた。早速軍服の用命があり、乏しい織物の在庫の中から何とか間に合わせたが、情けないことに武器はない。軍はなぜこんなに人だけ送り込む作戦をとるのか。兵隊さんが可哀そうだ。人はいらない。それよりも高射砲一門、飛行機一機でもほしい、と痛切に思った。

ある日、偶然にも私が学んで大学予科の多田という教授が配給品をもらいに来た。この教授からは漢文を習った。助平で、風変わりな先生であったが、教わった「老子」の超越、無、空の哲学は、その後長く私の精神的基盤ともなったので、あるいは名教授かも知れない。
「多田先生ではないですか？」と尋ねるとびっくりした。トモホンの現地住民女学校の校長として赴任してきたとのこと。わたしが教え子であったとわかると、さっそく「君、イイ子はいないかね」と、相変わらずの助平根性。－いやしくも女学校の校長なのにーと腹が立って、配給量を減らして渡した。

また、相当年配の兵隊さんが配給を受け取りに来られたことがある。年齢を訊くと、45 歳で王子製紙の役員だとのこと。「45 歳」は招集される最高年齢であり、お気の毒に思った。

この配給組合で日本の陸軍と海軍が戦ったことがある（と言えば大げさであるが）。ある日、椰子酒を調達しに陸軍の少尉さんと海軍の少尉さんが同時に来た。椰子酒はその日、在庫が 5 カメしかなかった。双方が取り合いになった挙句喧嘩となり、とうとう私の目の前で日本刀の切りあいになったのには驚いた。あごひげを生やした弁慶のような陸軍少尉と色白の牛若丸のような海軍少尉が、「五条の橋」ならぬ配給組合の私の事務机のまわりで白刃をかざして切り結ぶ。危なくて仕方がない。

何とかその場はなだめて、二人を海軍士官クラブへ案内し、話し合いをさせた。そして私から「二人とも軍の命令で来たので引き下がるわけにはいかないだろう。しかし、椰子酒の集荷量は昨今少なくなっており、今日は 5 カメしかない。私から言えば陸軍も海軍もない。同じ日本の軍隊です。しかしここは海軍占領地であるから今日のところは海軍の顔をたてて海軍側に渡してもらえないだろうか。その代わり、次回は必ず責任をもって陸軍側にお渡しする。どうですか？　この辺で妥協してもらえないだろうか？」と説得した。

これでその場は収まり、海軍側から特に出してくれたビールで乾杯して、この華々しい陸海戦はめでたく終結した。

（次号に続く）

編集後記

令和元年 5 月 2 日、北スラウェシ日本人会最長老の大岩富（現地名 TOMI SEMBENG）様が逝去されました。享年 87 歳。

トミさんは当地日系人の重鎮としてインドネシアと日本を結ぶ存在でした。商用や学術調査などで当地に来られる日本人のほとんどが真っ先にトミさんを訪問していました。本人はインドネシア国籍でしたが意識は完全な日本人でした。日本人墓地の建設にあたっても役所との交渉などすべて TOMISEMBENG の名で先頭に立って動いてもらいました。長い間、ほんとにお世話になりました。謹んでご冥福を祈ります。

これまで「タルシウス」発刊のたびに、製本されたばかりの「タルシウス」を真っ先にトミさんに届けていましたが、今号から墓前にお供えすることになります。寂しくなります。

今泉会長と木谷会長代理。二人の真珠系人は、このところ北スラウェシの観光資源発掘に力を入れている様子です。カツオマグロ、コプラ（ヤシ油）のほかにめぼしい産業資源のない北スラウェシ地方です。ジャカルタ中央から見て遠い僻地ということもあって工業開発の害毒から免れている面があります。おかげで豊かな自然がまだ残っています。今の時代、無垢の自然が最高の資源といえるのではないでしょうか。しかし、銅だか金だか知りませんが北スラウェシにも鉱山開発を進める不心得な企業が出てきました。私たちは公害先進国日本を知っています。公害の恐ろしさを知らない北スラウェシ地元の皆さんが判断をあやまらないように、自然保護の大切さを発信していきたいと思います。「タルシウス」で北スラウェシの海岸線のすばらしさをアピールすることは即、自然保護活動につながることです。

中村さんには日常生活の中で起きた日常的でない出来事を報告していただきました。建国 70 年を過ぎても、まだいろいろあるようです。油断は禁物。

インドネシアがまだ独立国でなかったころのメナドに赴任した一商社マンの回想記が手に入りました。非常に貴重な記録ですので、著作権のことがちょっと引っ掛かりますが本号と次号で紹介します。実はこの記録は、2 年前に日本人会の新年会に参加された井上浩一先生（日本語パートナーズ・スラバヤ）から贈られたものですが著者である小坂清見氏までつながっていません。前の「ハルマヘラ戦記」もそうですが、肝心の作者がご健在かどうかもわかりません。無断で誌上公開ということになりますが、これで一人でも多くの方の目に触れて読んでいただけるということで許してください。

（長崎）

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。